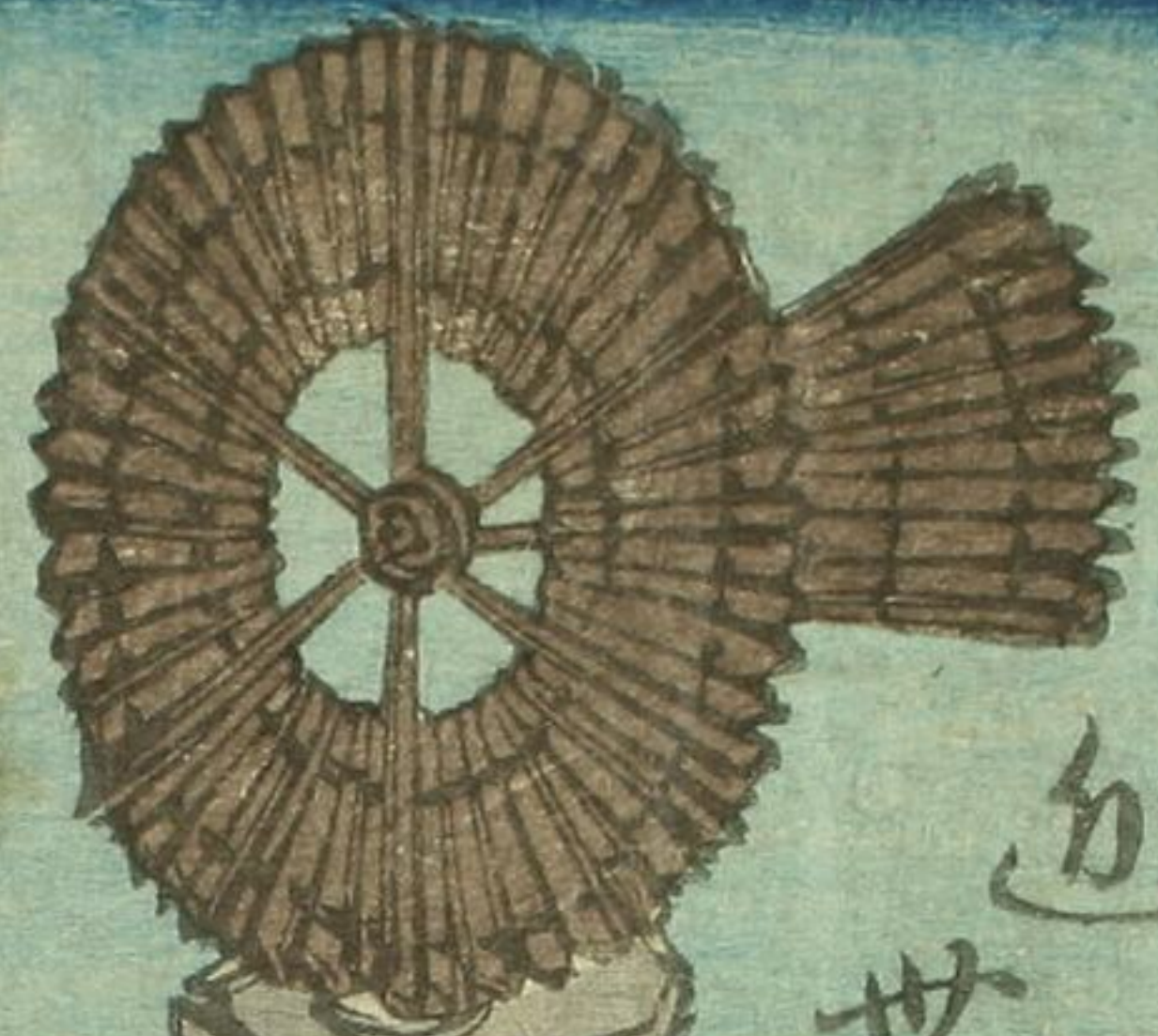


永高益高画
符回仙果綴大尾
之編



の係料

色世





藻汐草近世寄談

東の海
 舟の
 共の
 徒
 我子
 疾
 速
 名
 子
 疾
 速
 名
 子

A459

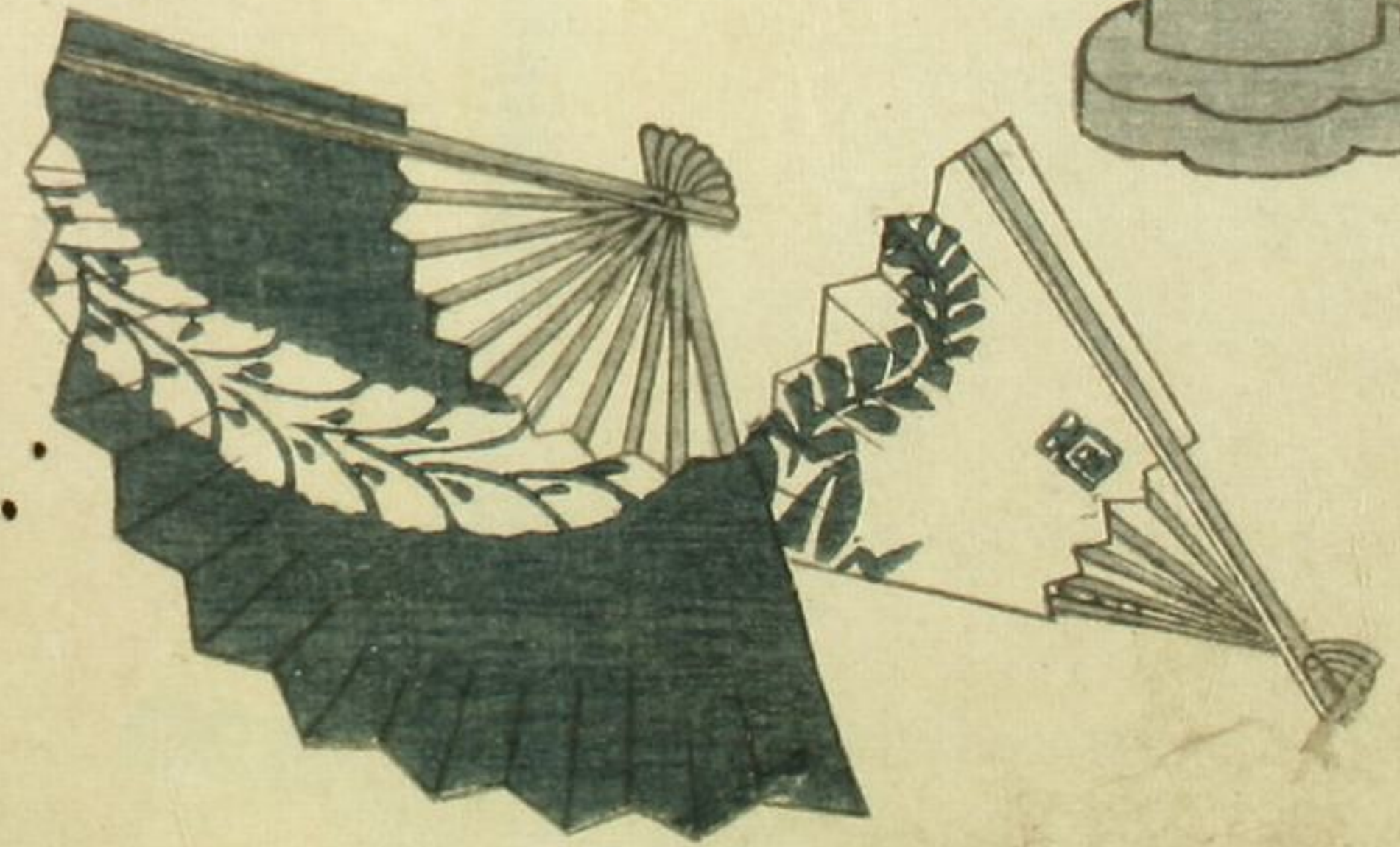
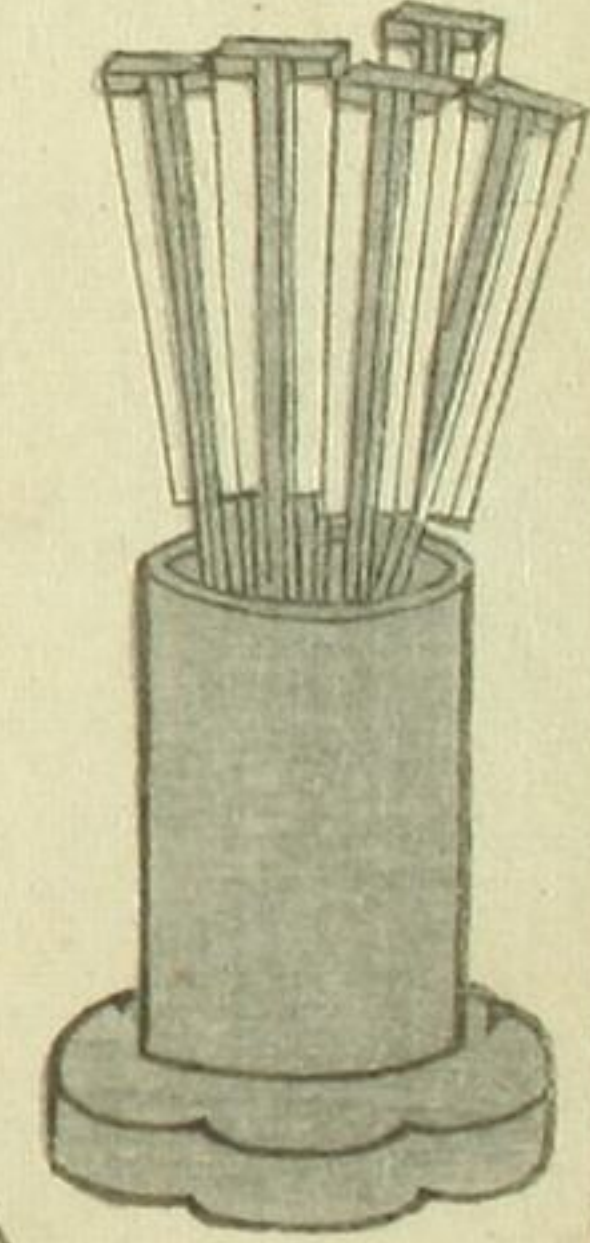
澡汐草

近世寄談

初編上之卷

篠田仙果録
永島孟齋画

青盛堂梓



浪峯画

世の中よの三日み名なぬ間まにささらら川が古跡こせきの數かずああと
 猫ねこが住すむ三味線さんまいせん堀ほりに雜子ざやの小屋こやのり。御殿山ごでんやま山
 めきしめきし所ところあり。深川ふかがわは川が堀割ほりわりて増ませり。時世ときよの變遷へんせん豈あり
 俳優やくいの早變はやがりに異ちがなんや。文場ぶんぢやうの戲墨ぎぼくもままり然しかり。
 むむじじく其その往古おうこ有ある土佐繪とさえの古風こふうと廢すり。親和しんわの篆書せんしよ新奇しんきと
 愛あいむ草双紙くさそうしの趣向しゆかうは於おるや黄表紙わうへうしの滑稽わくげき言ことば其色そのいろと共ともみみららめ覆おほひ討うち討うち
 流行りやうせせいが其その後ご奇術きじゆつの賤話せんわも。柯空かくうを論ろんじて幼雅衆ちゆうがしゆも手てににててば。
 依より繪入新聞えいにんしんぶんの内うち人情にんじやうの箱田はこゐの大人おとなが妙筆めうひつを抄録しやうろく為なるののり

月兔泥電池の編輯人 竹條田仙果



上原 文 左 二

東京
小間物品々
社入

松下安次郎
まつしげやすじろう

藤間の養女
ふじまのやしなひ
於秀

美石の抱え
藝妓若國
みいしのかかえ
げいぎわがくに

大工棟梁
福引市造
おおくみとうりょう
ふくいしぞう



上巻 夕草 一

下巻 夕草 一

つきこれ共お玉母子

三人とゆつも連れて

道取坂へ玄に

及をば天満いまりに

舞木ホの芝居いねん

あり目ごと或い任

吉塚のえ物又い

かんぎうの



お直ぐ例子

初病

と

工面

さ

と

道

き

と

持

す

○後振線
買てをさるハ
十二才妹小

△ん有る山

いるとまごめ



久友の
懐

お直ぐ

さる

さる

あり

く

と

と

と



あひでとらえは候けり
 ろろ五月庵なれど
 花紋家業と云
 とほよきやうか接招
 ながさくのあせかれ
 ながさくを送上己の
 彼奴もなきがあれどなく

がらの
 つとりのせは強法
 あひでも候まき
 ヒレヤンと桐付
 て述べは久者
 高のながさくれ
 どあひ摺りて
 いろくさう
 締工風
 こゝろの
 お袋を合
 ぐつを味方と遠



あひでとらえは候けり
 ろろ五月庵なれど
 花紋家業と云
 とほよきやうか接招
 ながさくのあせかれ
 ながさくを送上己の
 彼奴もなきがあれどなく

あひでとらえは候けり

あひでとらえは候けり

あひでとらえは候けり

後醍醐天皇



つぎ久松だ
 合掌のり
 己ま別
 の車をほほ
 静に引せらる
 久松の厚眠の如く
 又もあつこき致致車よ
 おひてのりて致致車をり遊出
 久松の中息かたき世に地
 して一縮まよありて希し内車が
 歩かふつぎうつくつねに杖が門に
 ホツと一息つくるもあつたふり川内け
 久松の厚眠の如く
 又もあつこき致致車よ
 おひてのりて致致車をり遊出
 久松の中息かたき世に地
 して一縮まよありて希し内車が
 歩かふつぎうつくつねに杖が門に
 ホツと一息つくるもあつたふり川内け

澡汐草近世奇談

初編より
引續出版

松飾徳若譚

六編より
追て出版

今朝の春三組盃

三編より
追て出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町二丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

東地本錦繪問屋

日本橋區米沢町二丁目七番地

出版人 堤吉兵衛





廿藻汐州

近世

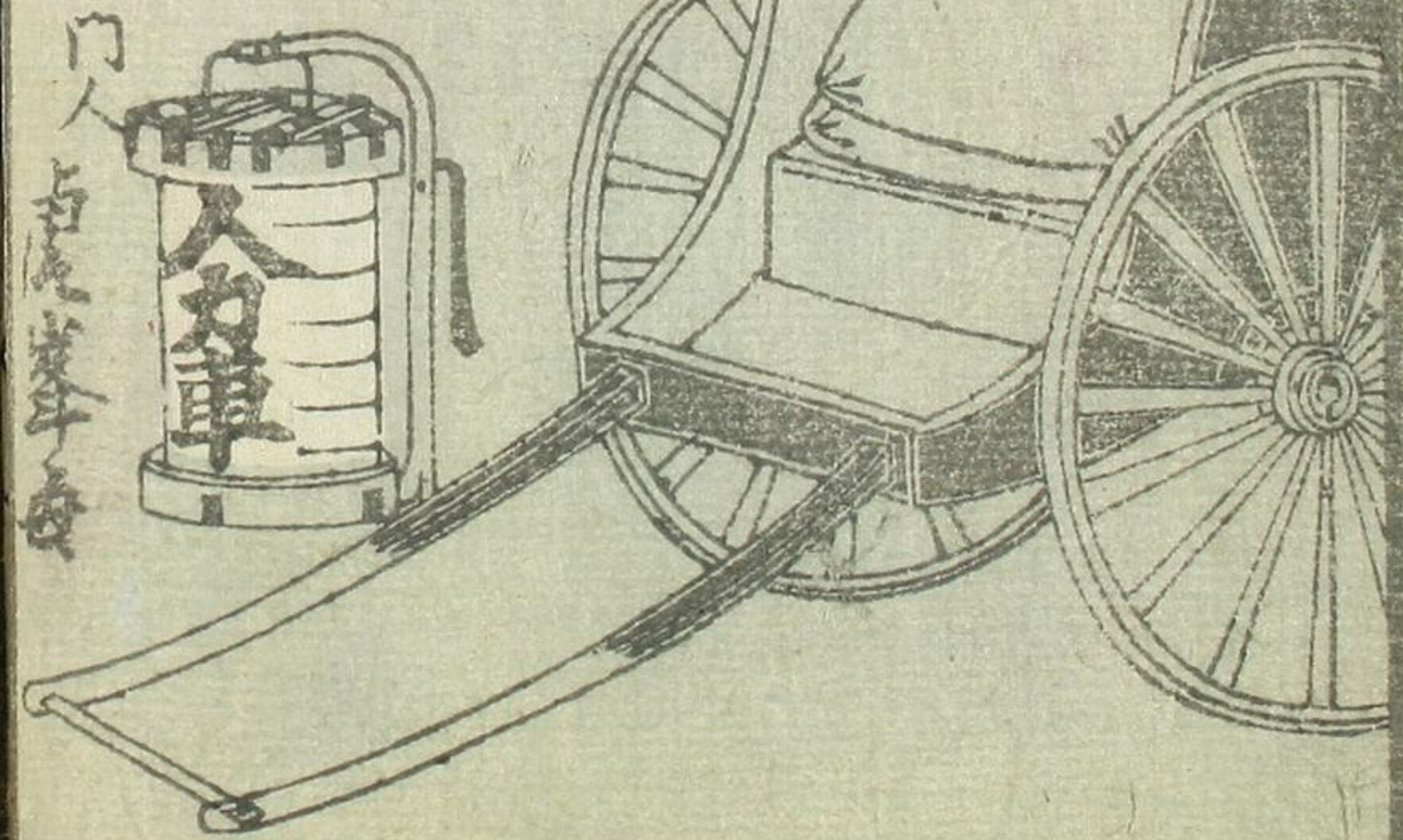
家修初編

中の光

心果強

孟高画

初吉板

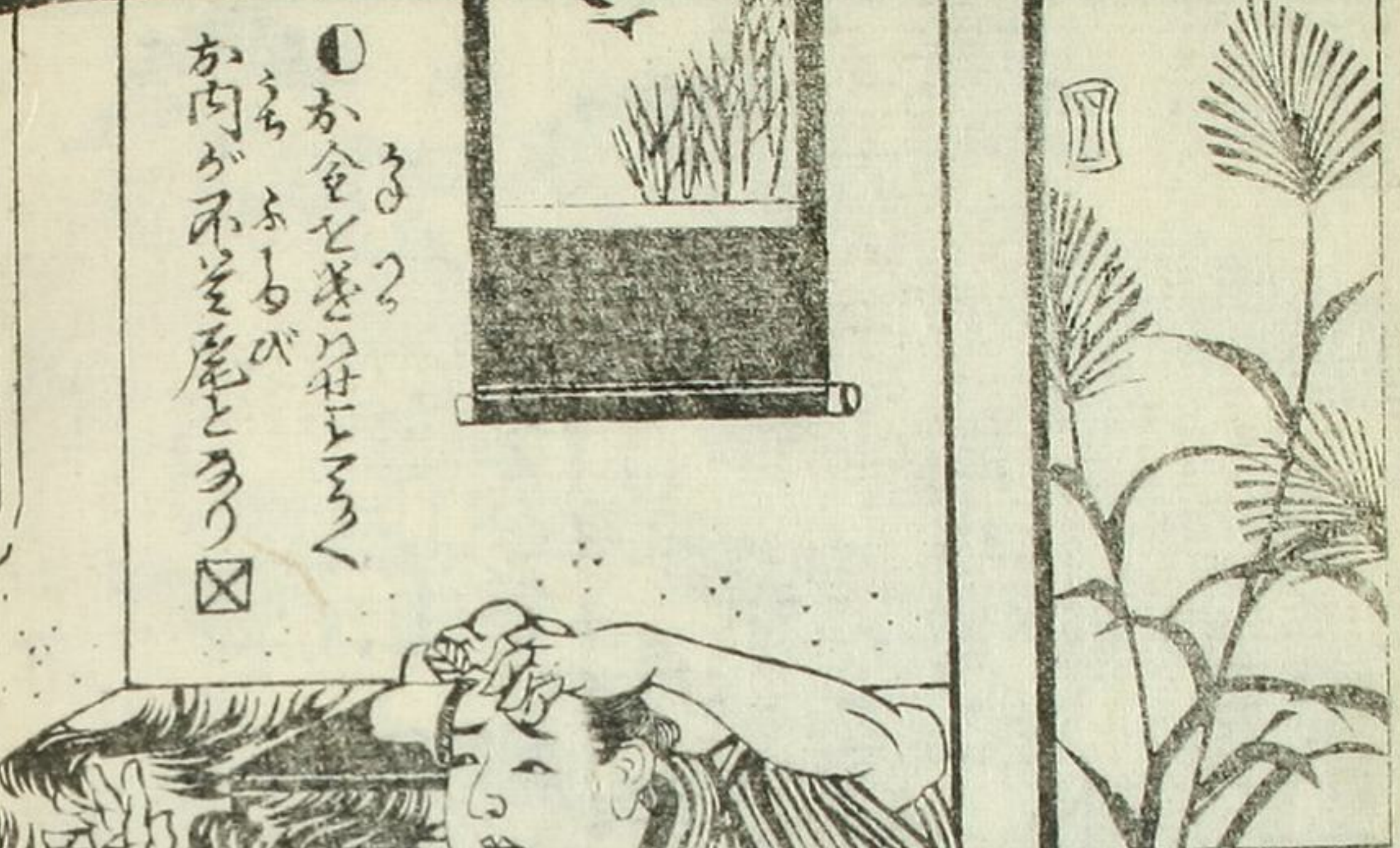


か金をきり仕とまへ
か肉が不足と尾とまの

お金の毒といゆしゆ
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒



お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒



お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒

お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒
お母さんのお金の毒

ついでに根柢の安んずるを除去の外又男の犯らざるに

猶ほ三年の間の

破れ急いでい

安んずる情状と世にまなれ

心細の振る不束者のいふ出で

嫌まごころいふのせん

未適女のあこ

ふと碎くおし

葉の留小株で振

久吉同を遣してまを打

ふぞあまきとあまぬ密注

あれは花あまぬといふ

下女とく久まんが

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

と急旋と指てあまの

久吉の研研ふ急旋の

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

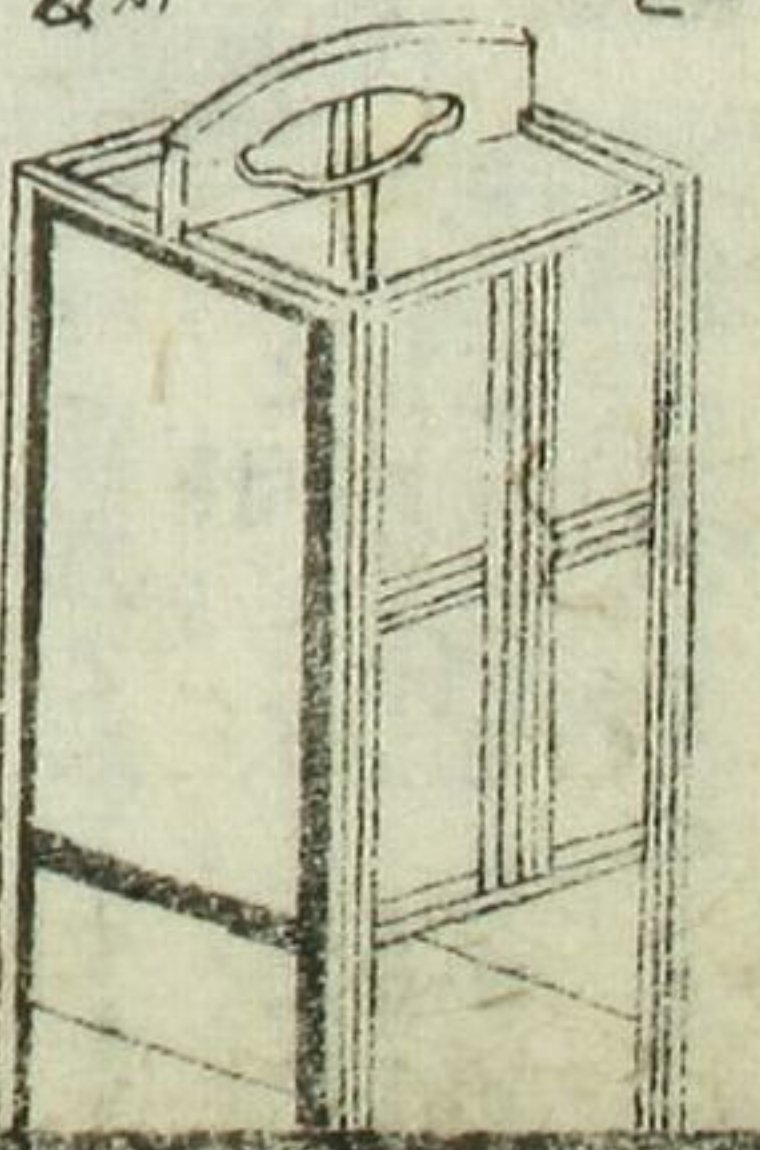
あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと



のやうぢやどりや宅へへりま

せうとあまきと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

あまのふあひをいふと

つぎ 二葉が
なよりお秀
あやこ 女
母子を運ひ

の若がまじ
うかお秀
ハま
りとぞう
とせ

と
とせ

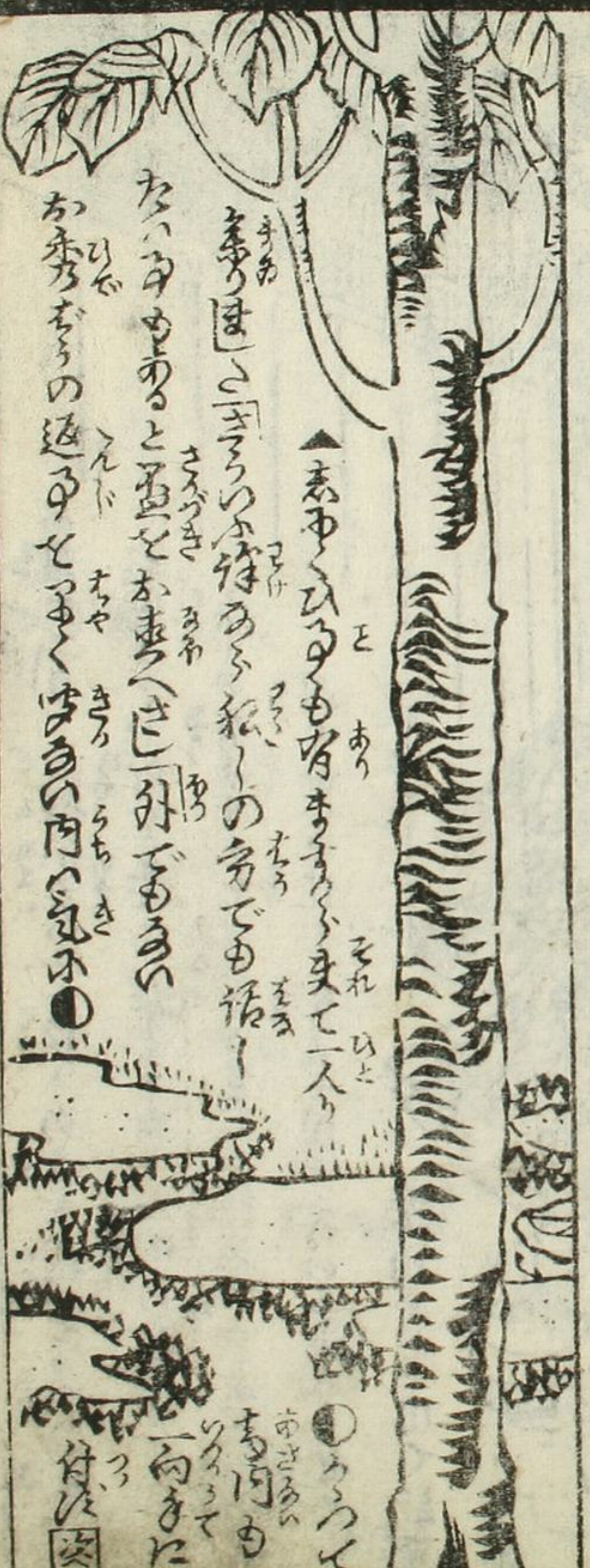
このあぐんのまひに二
よもろくひん

お秀ののじつに色の二葉が
のあぐんと運ぶくはく

○二葉の難色社治小久香八天安社子くお秀がまじ
かひとか時方もんせれをて姫して信而へは
まるとお連が初サアくは方へと漆子とあけ
「オヤお母アあのお秀をうへお秀を由二取めと
作あつて下さいまじが彼が飛てんお出」の

お秀ののじつに色の二葉が
のあぐんと運ぶくはく

お秀ののじつに色の二葉が
のあぐんと運ぶくはく



▲あやこひるのも有まするまて二人
まはしごころのな符あふ松の旁でも話
たのむもあると魚をおまへば「外でもあ
お秀をの返りてまじまの内に気小

○うらつて
おまの
ち内も
りくして
一向きに
付込

つぎ 夫より性小欲うること 〇 夫より被今後 〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

ト一札を燃めて 五十四と交 〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

安城區一〇〇 今宵難波の狭眼者 〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

おひををつれて 〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

まて下されやと 〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後



〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

〇 夫より被今後 〇 夫より被今後

鏡物教小

か秀を無理に引
 こせるとお連入
 見るよりそなたと
 外へぬ用アおひ
 くるは方へ来ると
 ひととちを先ゆ
 次のるおのくさ
 体の上お安れと
 知るみるまゝ
 おひての春一は
 きれい 男お礼お



横小きうお小
 遠息とくくお
 のちと共お出
 お戸窓お小押
 下息

と
 吐る由
 きる入
 かつる
 長所
 月を
 ひは
 長門

あつち
 後おひを
 をお
 知し命を
 あつち
 千万
 おの女房と
 女房と
 女房と
 女房と



おの女房と
 女房と
 女房と
 女房と

おの女房と
 女房と
 女房と
 女房と

おの女房と
 女房と
 女房と
 女房と

必定持し私し由助けしうらひ何如き由
 助成する放種なるをばつてあつたぬといふ
 つれをばしるを可あは
 後者のお秀さんおねり
 とさへ助けらる人せ務
 めてうらひをばし今迄も
 行時忘るるんぞ
 まとせめたる
 多指の安さ
 史婦くも又知はる
 再びハハとさるるんぞ
 安二身ハ何いさるるんぞ



此の如くは
 追々出版
 廿編より

新編西國奇談

追々出版

薄緑娘あなみ

八編より 追々出版

娘庭訓黄金の鶏

追々出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町一丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

地本錦繪問屋

日本橋區米沢町一丁目七番地
出版人 堤吉兵衛

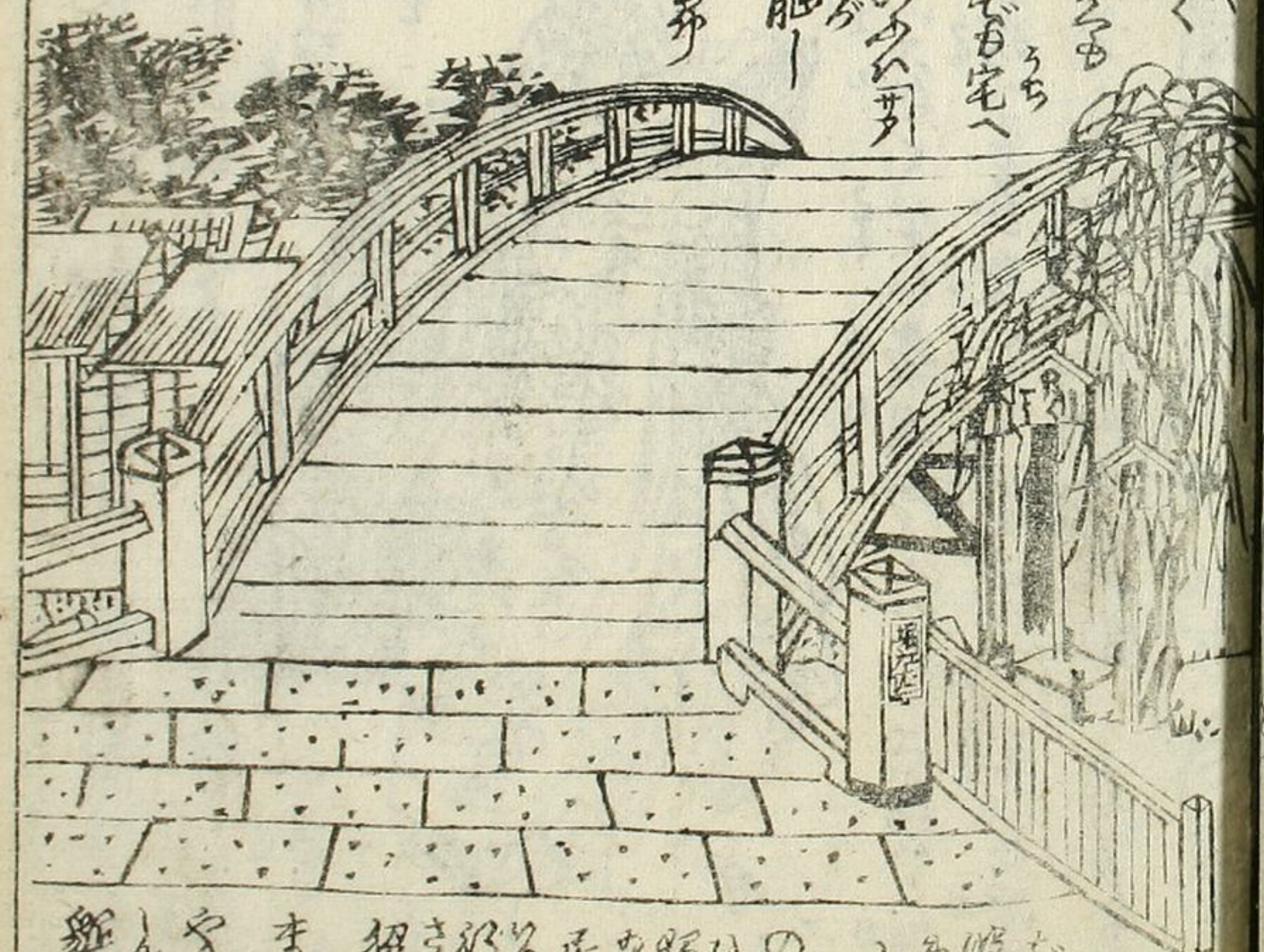


永島孟齋画



賀金

中つゞき 後院と為す程ゆき
 宅へお取りまとのれや お秀へおま
 らせ 留まらざるごとく 入る手か ぬいで 宅へ
 へ ぬれません 用にて 休とりの 別
 けを 下さぬ 突い くるく くる と 触
 る あり けい せいの せいの せいの
 由 能とく 用にて ぬいで
 けい せいの せいの せいの
 まの 儀一 何と 儀一
 途 中 の あり ぬれ ぬれ
 幸ひ ぬれ ぬれ ぬれ



ぬれぬれ ぬれぬれ ぬれぬれ
 ぬれぬれ ぬれぬれ ぬれぬれ
 ぬれぬれ ぬれぬれ ぬれぬれ
 ぬれぬれ ぬれぬれ ぬれぬれ



仙果 珠 初編 下の
 孟 高 志
 青 冬 文 彦
 ぬれぬれ ぬれぬれ

雨 景 也

つぎ 云々 痛む足の麻ん死させ世と隠して

自林と云々 懐中せし茶との色せき扱と

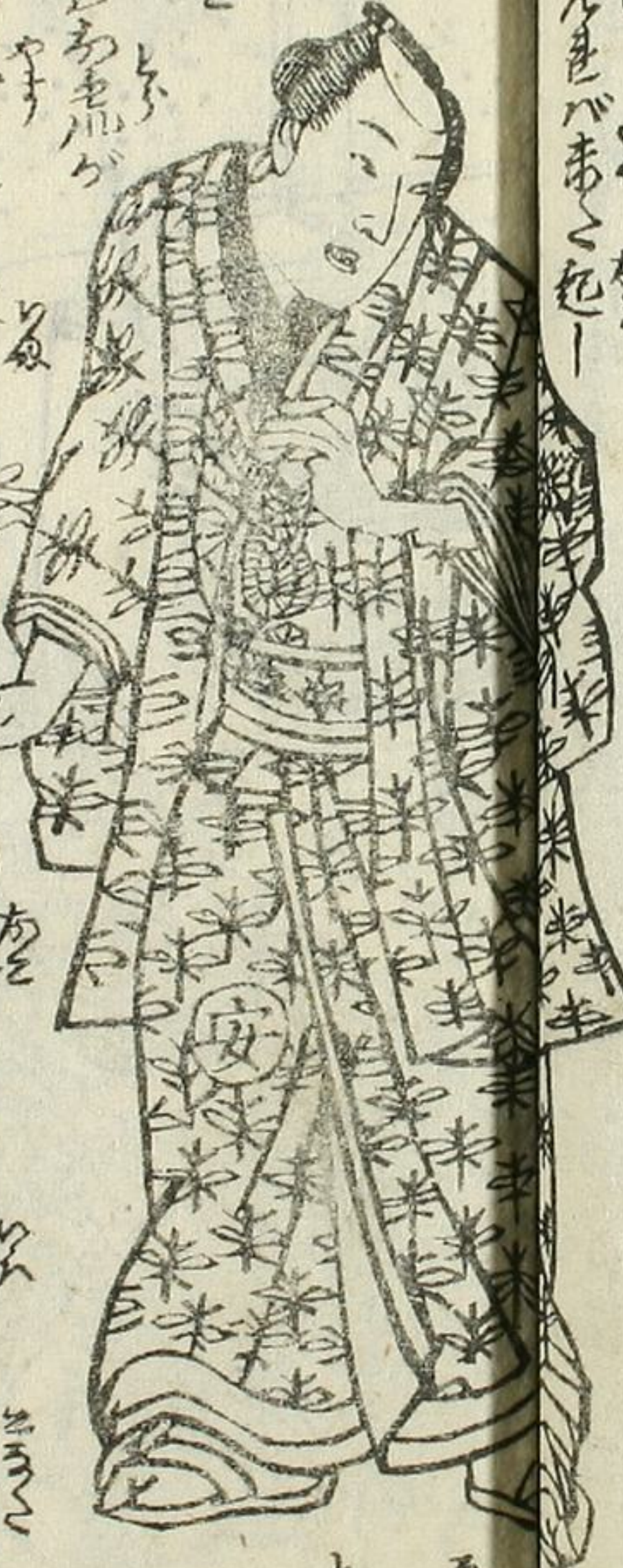


のまのーくををを

完全く笑ひ夜具ふえと

二階へと押上り

横子あるね



か髪をえす

起さうと云

二階へと押上り

余程あるうのさぞ



二階へと押上り

利が宿りあふささるおまゝと
 お虎
 い階子とちり
 てゆく二人りの誓
 らくほけの道か
 えより互ひの徳さ
 同土吸付て出た煙
 葉のむらさき心あはせ
 じと月小道あひなげ
 海津さ糸繩を結ひたり
 初まの年の後五時さ
 乙是く由お秀のここと

二日一丁敷りるといふの
 後者まの何足ある夜
 泊り白
 とまり
 ちきとりの入の
 世後小るぬ身
 のとあゝるの上
 うかひまのせんを
 死奴小娘て
 最まの
 宛ッ運入
 小

と累夕立

時うらふ今日
 舌て落付すしお涙と
 うくお秀よとひさすふ二人りの
 海の中とあひしゆを夜あはれ

ちきとりの入の
 世後小るぬ身
 のとあゝるの上
 うかひまのせんを
 死奴小娘て
 最まの
 宛ッ運入
 小



物部村の台口と
の船渡へ船が

二三年あつくと
大畧由一由極つ
史家誤神候命と
伯父孫や伯母さあへ
ぬりて有るれと十田余りの
金と持出ー且以洲と大
藤まきと移候とて
おとよ由藤田に居て何
ゆつりう田れがふ小目的
も金とれとおまの突の



唐草

名座
あて
たて
あふ
板屋
よて車
まとの
通好い
知末

親とあつ出まの松は賢由
希とのりゆ人あわてり
ままとれ方のりとも
ままはは昭の船候のあは
人目悲へあ人へ大坂とま
附小治八幸十一月廿五日のり
ありなる供西風揚り押切の
子船候考丸小舟思ひし
風悪く船が船と出まは六日由帆
一廿八日夜の十二時ら由後
尾の船小舟船せり登込ハ二人の
若いのりや近ふふまのせんと



あまのし
物めてん落舟て
船小舟起るの船あり
物一止り系及も
されど多分の振舞とを
あく且あむい少しあ
船小建くる意けハ
十二日
市村といへ
尖小後まろ

けいせいの様かよとあひまきすがどうう校極い

あきまきのうのやあまがふらふのき

あまのうて上まきうがまふと

あまのうてあまのうて

あまのうてあまのうて

あまのうてあまのうて

あまのうてあまのうて

あまのうてあまのうて



二年と松の

三年と松の

四年と松の

五年と松の

六年と松の

七年と松の

八年と松の

九年と松の

十年と松の

十一年と松の

十二年と松の

畫圖 子血齋 芳虎

編輯 篠田仙果

初編より

引續出版

松飾 徳若 譚

六編より

追て出版

今朝の春 三組 盃

三編より

追て出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町二丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

東地本錦繪問屋

日本橋區米沢町一丁目七番地

出版人 堤吉兵衛

之澤泊州

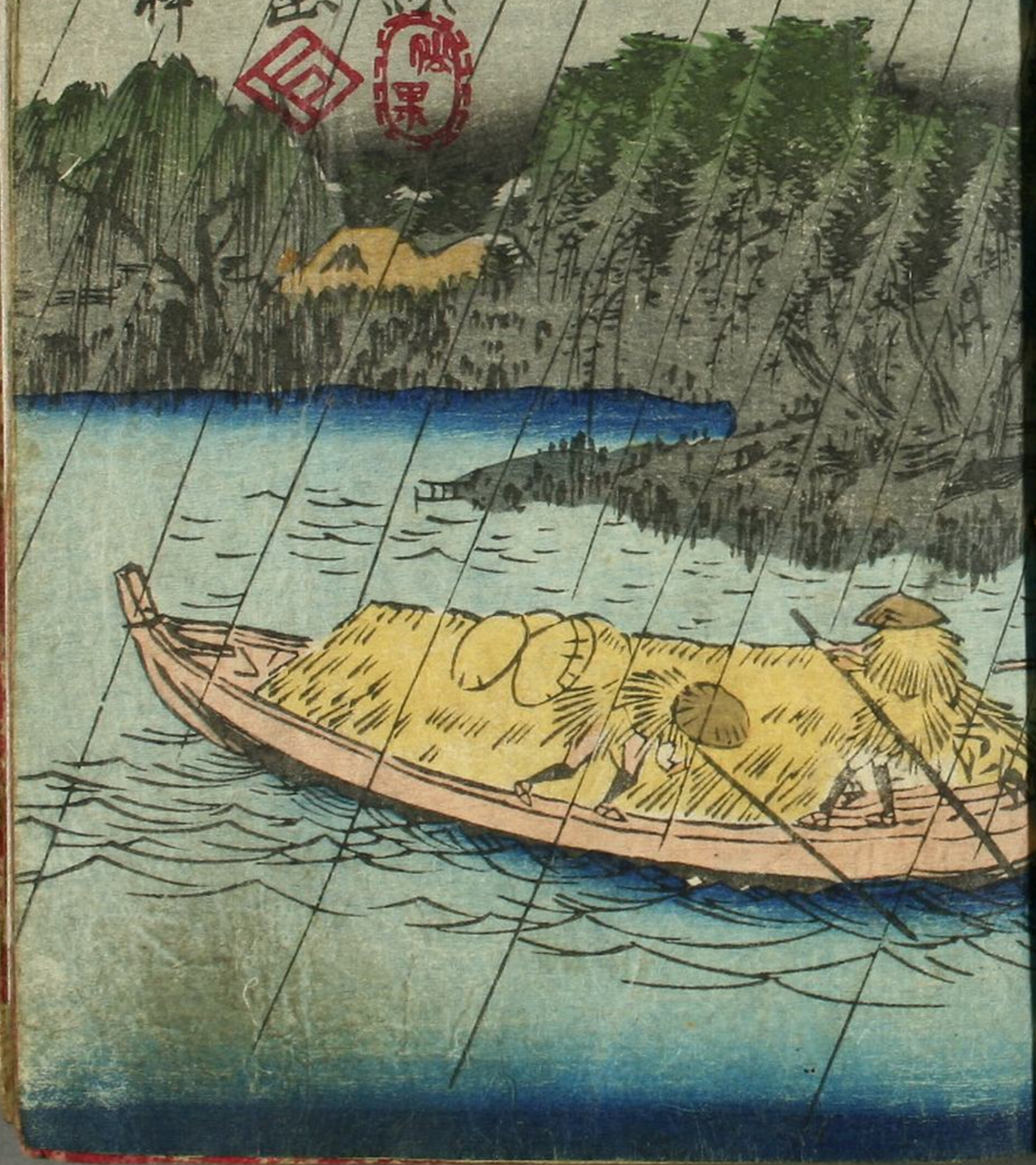
近世奇談

第二編

以條田仙果綴

永念孟書

青盛堂梓





藻汐草近世奇談

三編上

四方請買以
 先請候以
 法西乃と
 舞也
 速
 也

藤泊

子

色世奇法

二編の上

仙果綴

孟高画



まろ文

文後

緒言

原來非力の小生が嗚呼かまじく秃筆より硯田と
 耕やせむ作漢と号されし時種ハ不流行が多きさう
 こそ、肥土學に乏し。依て言葉小花と咲せ。實の
 有趣向ハ得易く、本年丈故畑と變へ鴉り
 何の探報者が、梧扶出せし實説新話一ト鋏ヲ鋏
 うち返し。男と終め此巻ハ男女共道多し、色情
 カツホレ給ふると。老婆心は物せしめん

明治十二年一月

篠田仙果記





大坂北之新地
藝妓小龍



澤淳屋
金助

東京教寄屋町
藝妓小蝶

薄沙草二上

むらさき
おと
のきやま
喧嘩うゑ



悪漢
瓦間の兼造

薄沙草 近世可談 二編 上之巻

初編の巻 管玉橋の妻おたけ

おたけの事を探る実母の傍縁

と大のふさびおたけの

榮を以尚しく同乳せり

そのあらのい

しがはあや

つてはあや

まおとまおの女

依まおの病の

勇方へ再嫁せ

小籠へ手あ

まおの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おたけの事
おたけの事
おたけの事
おたけの事

おき おき 網を係一 其あつのとやの
 糸一 お実の母と云ふ 小若 幸ひ 様と云ふ

おき ねあつたのや

おき 三才小

おき 女の子をばば女

おき 小遣と云ふもの

おき お茶のふりこ

おき 其小遣をばば

おき よりおひでん

おき 貴女身

おき 小あつたおお後
 おき 舟の船取の御也



おき 是上
 おき お虎の姿
 おき 空めり 其まんの伯父
 おき さん才でもおひでん
 おき どのいづらあつたおお後
 おき さん才
 おき 其まんの伯父

おき 大坂へあつた

おき と云ふもの

おき 三程あつたね

おき 玉櫛のまゝをばば

おき 旧はひでんの客人

おき 貴女身

おき まくまひ二人へおひで

おき 此邊は日さすは 浪花子

おき 昔うゝ人用と云ふ身の上

おき 夜ふへりて 中あつたおお後

おき 二階へあつたおお後



おき 長あつたおお後
 おき さん才が怒り出さる
 おき さんへ周回つて五十
 おき 其と隣へおお後

日新の兵衛お舟の病を治す
 探すに病の宿まのトト
 お虎の病を治すに下なるま
 湯を仕切の人のあはれがねの上
 ませうとお虎よりまへてま女細
 病を治すに病の宿まのトト
 お舟の病を治すに下なるま
 湯を仕切の人のあはれがねの上
 ませうとお虎よりまへてま女細



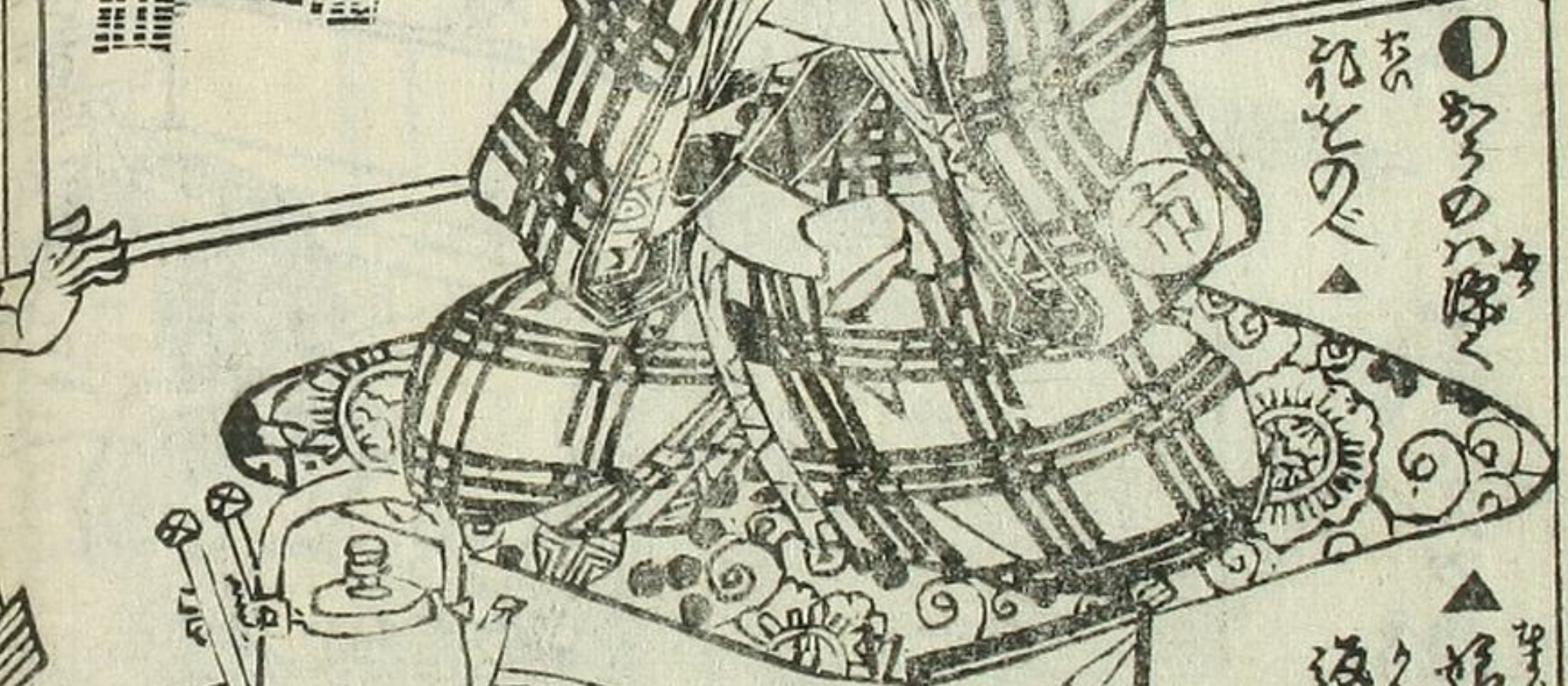
病を治すに病の宿まのトト
 お舟の病を治すに下なるま
 湯を仕切の人のあはれがねの上
 ませうとお虎よりまへてま女細

集夕草二二

五

大八

方々
 探索
 二入
 母の飛
 望上坂
 せしめ
 活し



娘の命を救うに
 返るに仇とお家の名
 角あひおせ
 びんまの
 松が波
 のま

海江三二

四

太子



ついでに
ついでに
ついでに

ちよと
ちよと
ちよと



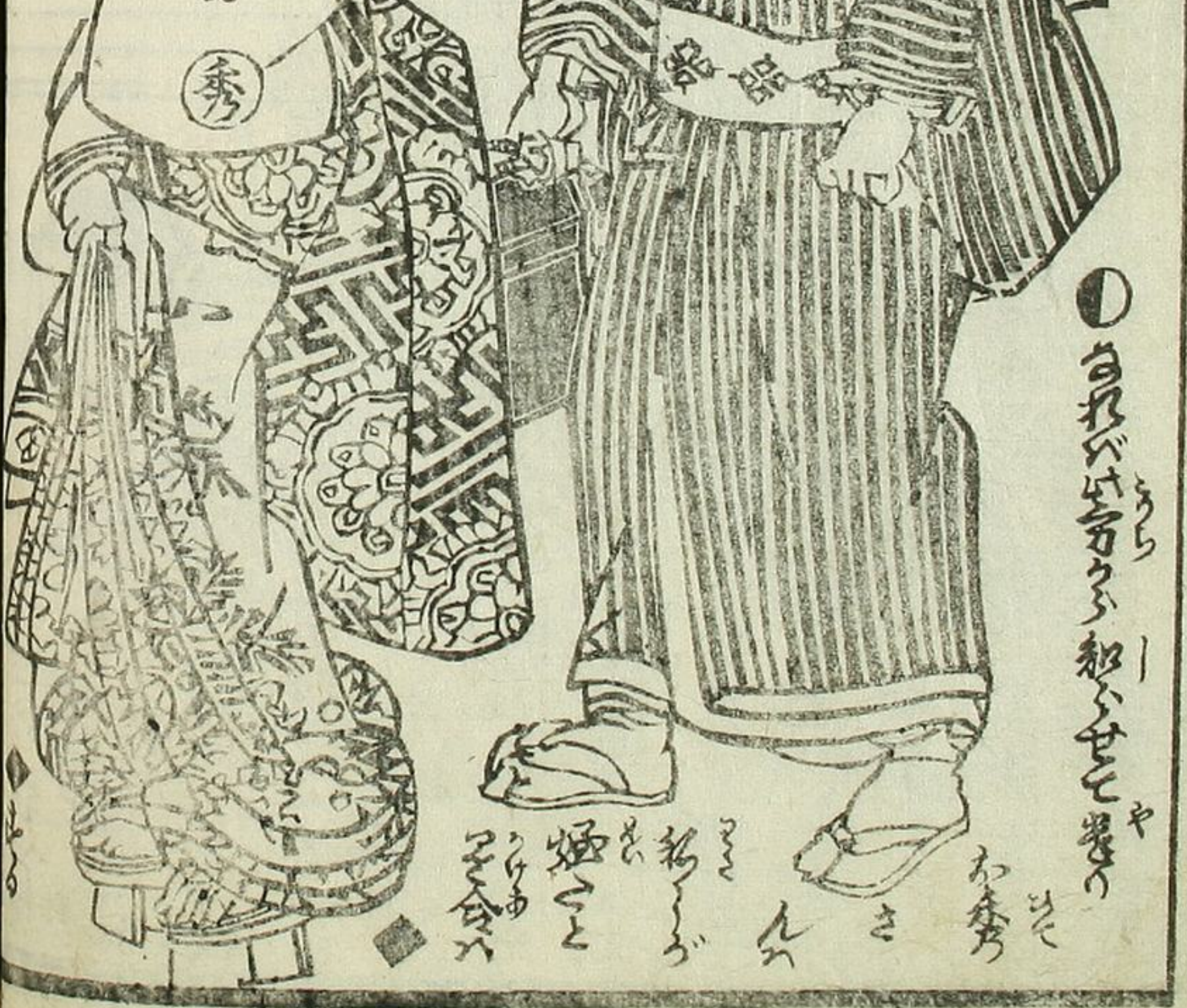
お母の
お母の
お母の

お母の
お母の
お母の

市遣へ若衆人とて均
纏く見え
すおろ門へ
からくと人か
車の善世が
おせと格子をぬく入るもの

あ秀の親子
二人妻の
まことと彼
かお秀親
ふありといふ市遣

心めて女房ふは
妻へ招け二人は
福引親方
後のよほく
出来は
小正と
お安
おと引遠
若衆の善母
文治と
お押
連く

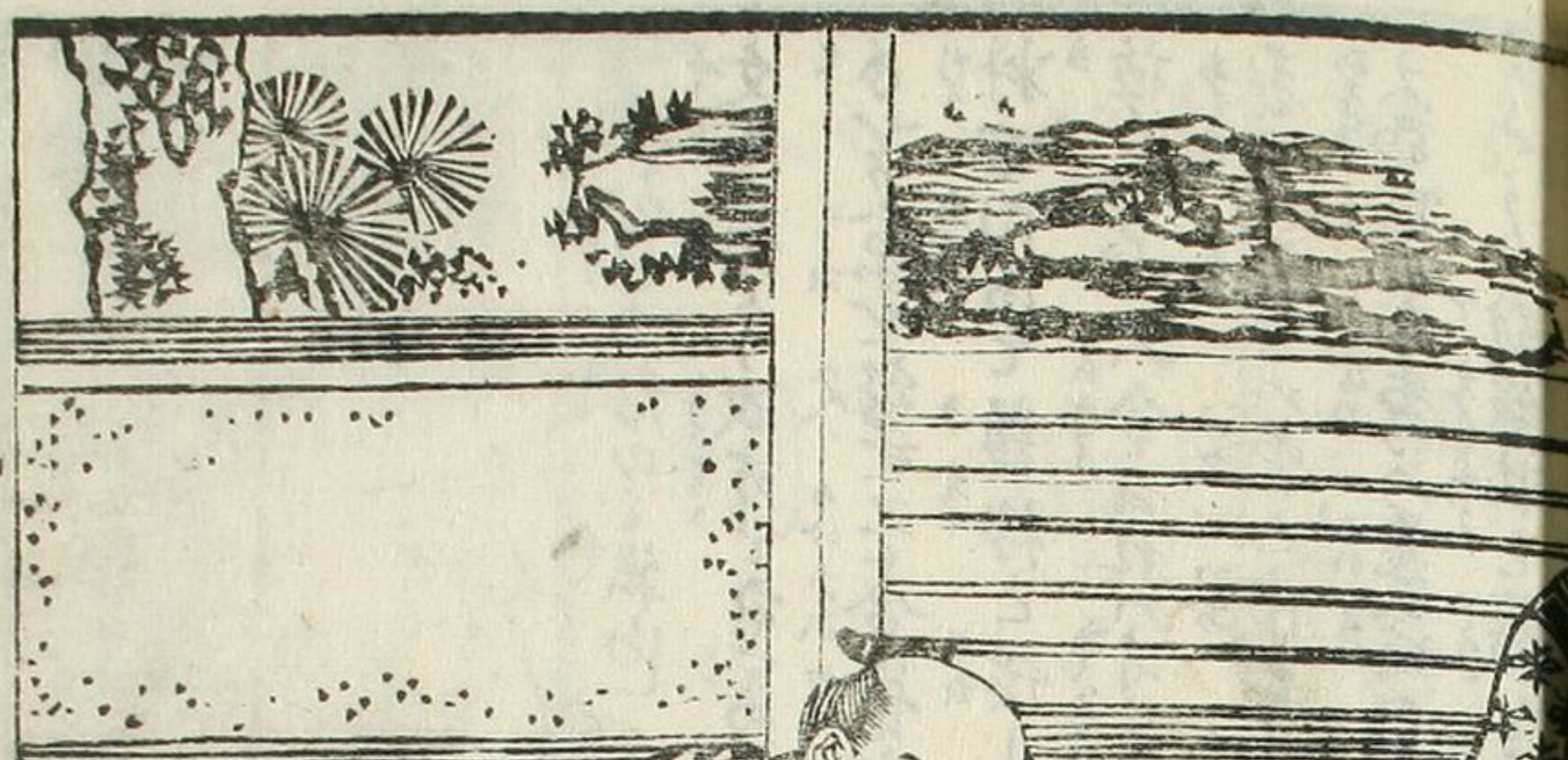


お秀の親子
二人妻の
まことと彼
かお秀親
ふありといふ市遣

心めて女房ふは
妻へ招け二人は
福引親方
後のよほく
出来は
小正と
お安
おと引遠
若衆の善母
文治と
お押
連く



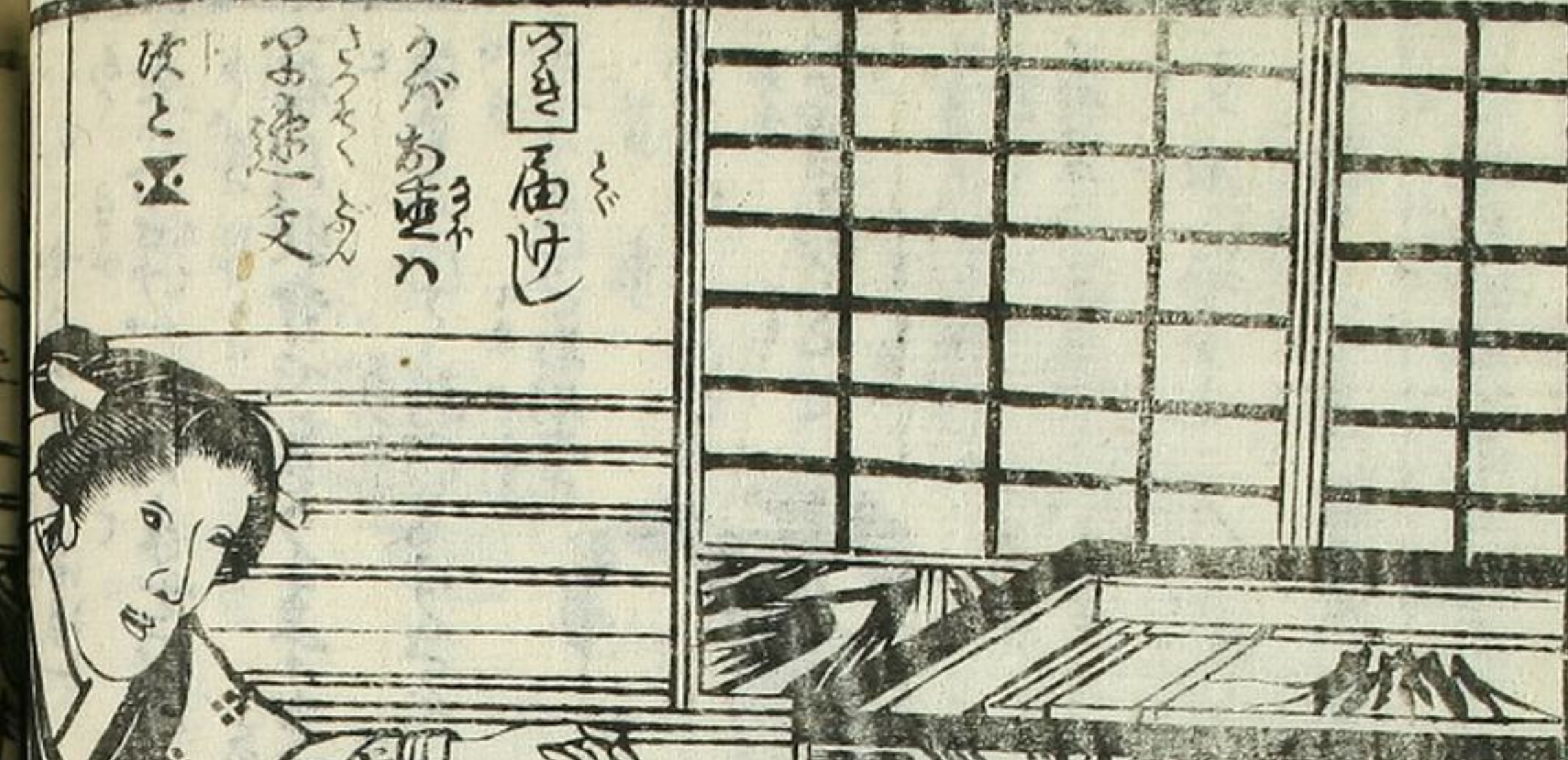
お安
おと引遠
おと引遠
おと引遠



下されといふと市道が止む
 下されといふと市道が止む
 下されといふと市道が止む

共々市道
 共々市道

南無三十三の
 南無三十三の
 南無三十三の



五平田
 五平田
 五平田

面
 面

海
 海

夕
 夕



仙果田條



書出し掃を掃めさす小筆筆とも功者
○女は赤と原の正しく一ツ小あつ

母のあつの小安んさせん
夫のし神や以いいの

あまのめ母の許や
安んさ

かかしも原さす必すとさうた横いふ人あつあつの

肉私の言へかして下さの意い

あつあつ人うて
何者見せか

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ



あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ



あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ

あつあつ
あつあつ



の外も
 どの
 もで
 外
 の
 後
 り
 橋
 と
 決
 へ

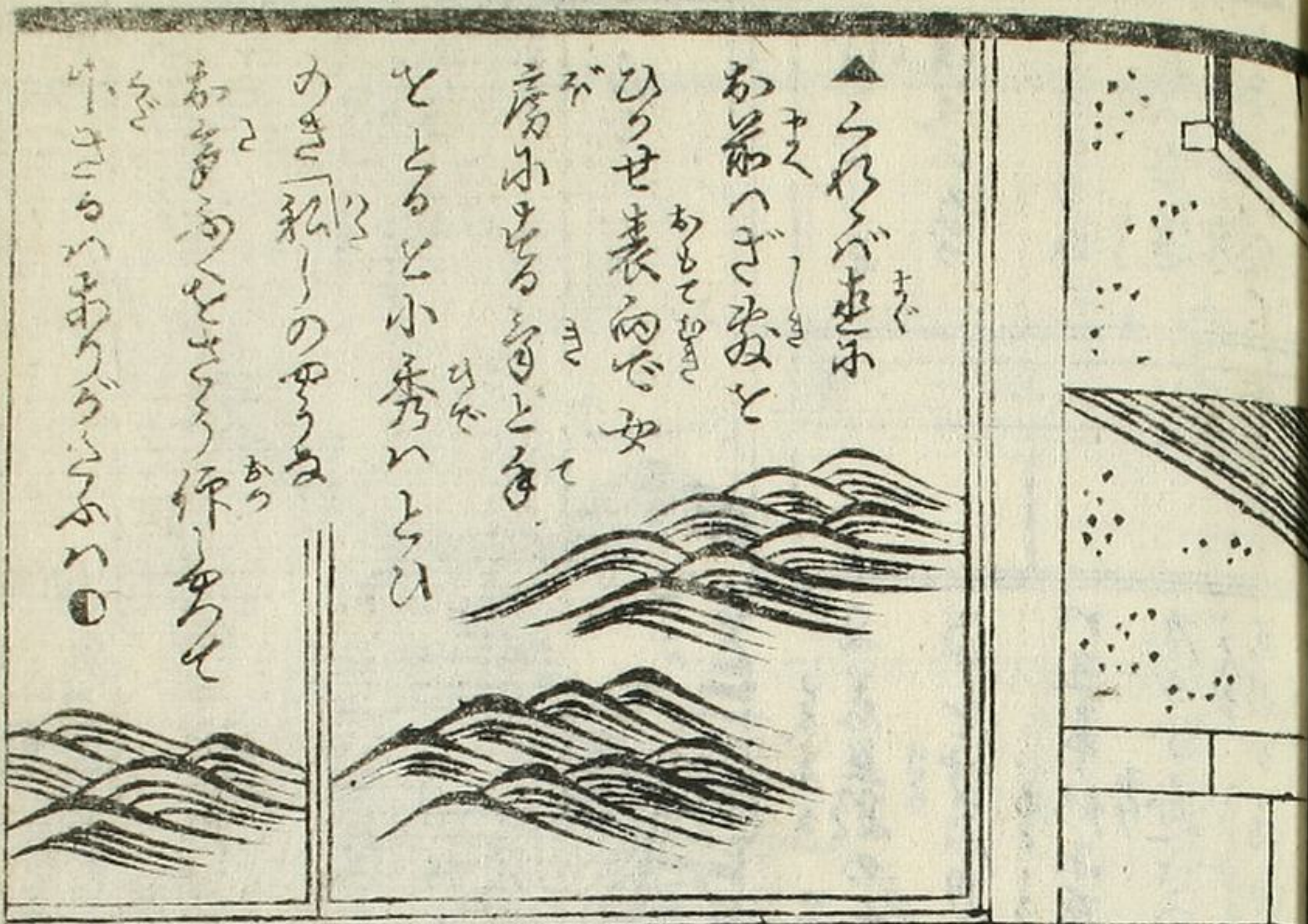


口がかわやまなもそとく
 換扱色々客々なれハ
 命まを拵んとおひのめらりし
 こゝろ小春ハハット
 「おひをせんクーあうご
 子正まア

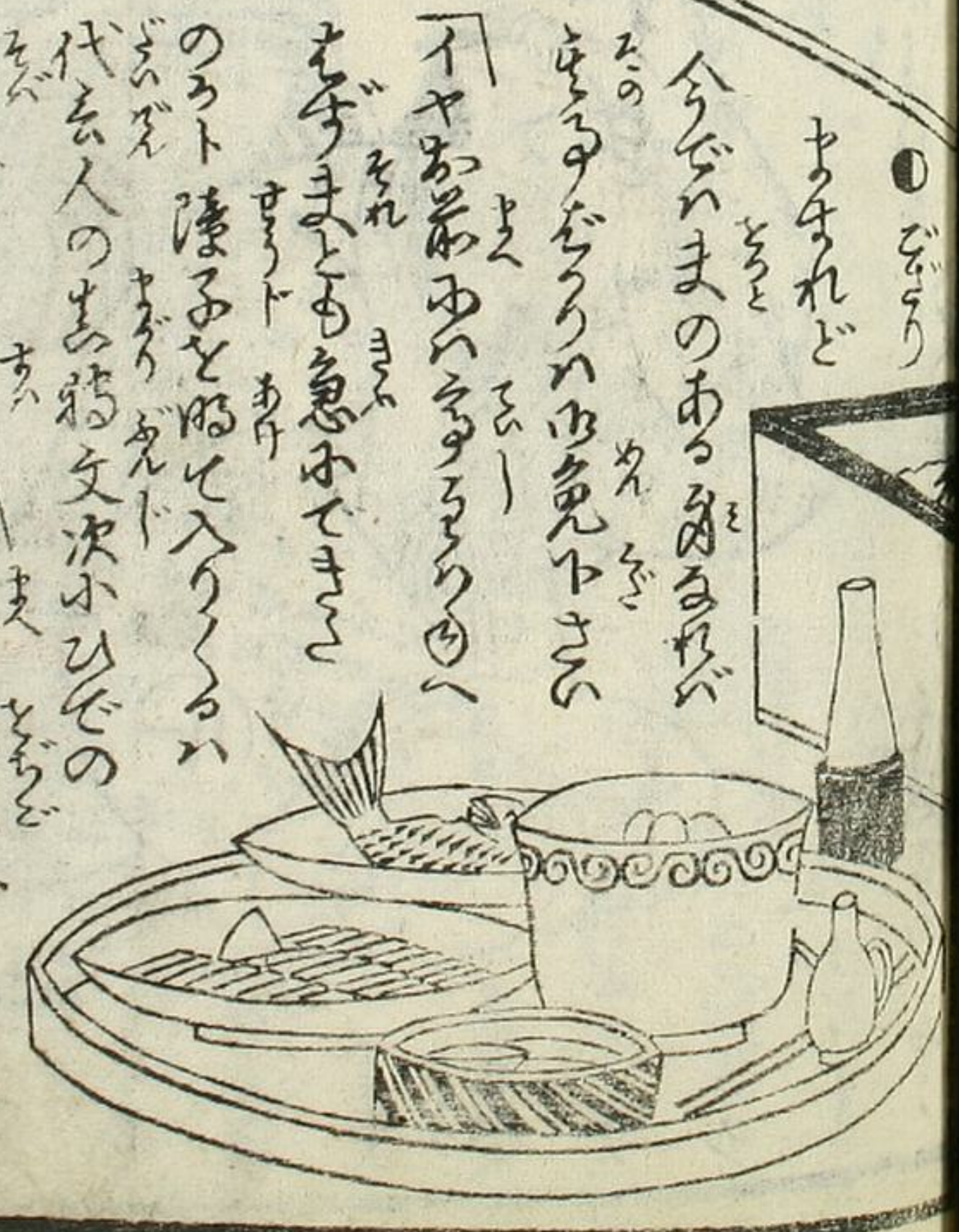
此の
 角
 酒
 器
 と
 今
 更
 通
 り
 今
 更
 通
 り
 今
 更
 通
 り
 今
 更
 通
 り



人小
 世世
 類の
 ぬー
 その
 りと
 己
 松の
 類
 と



くねくねと
 お前へさあ
 ひらせ表向女
 房ふさるふと
 ととると小
 のき「私」のやうな
 おまへをさう
 小さらいありうらふい



今このまの
 今このまの
 イヤお前
 ますまとも
 のちと隣子
 代去人の
 候へらら
 市造が若
 別と放
 此文次

つぎ
 え来まへへ懐快の席へ入らる口とまやぶがたふ
 思ふぬ女をおさふお遊覧吐しの笑しつゝの連々
 今合は助かあつらふお秀の判方状元と吐しと
 さらうまア高懸入組むりッがあるあせま
 今日いふさう面白くおもふてある
 先へト云まのされて久者文
 治若とゆいしうの酒ををて園
 その日いふまゝ立別れを後業
 重か中へ入りしとてい治まのる
 ○安石の店へ怪と匠安以希の真件
 小敷田向く勤めいふ人とおとめ
 安石の店へ怪と匠安以希の真件

懐快の席へ入らる口とまやぶがたふ
 思ふぬ女をおさふお遊覧吐しの笑しつゝの連々
 今合は助かあつらふお秀の判方状元と吐しと
 さらうまア高懸入組むりッがあるあせま
 今日いふさう面白くおもふてある
 先へト云まのされて久者文
 治若とゆいしうの酒ををて園
 その日いふまゝ立別れを後業
 重か中へ入りしとてい治まのる
 ○安石の店へ怪と匠安以希の真件
 小敷田向く勤めいふ人とおとめ
 安石の店へ怪と匠安以希の真件



必らろく
 と唐
 各が同
 安石の
 抱へ舞
 妓手取と
 呼のい
 安石の
 安石の
 安石の

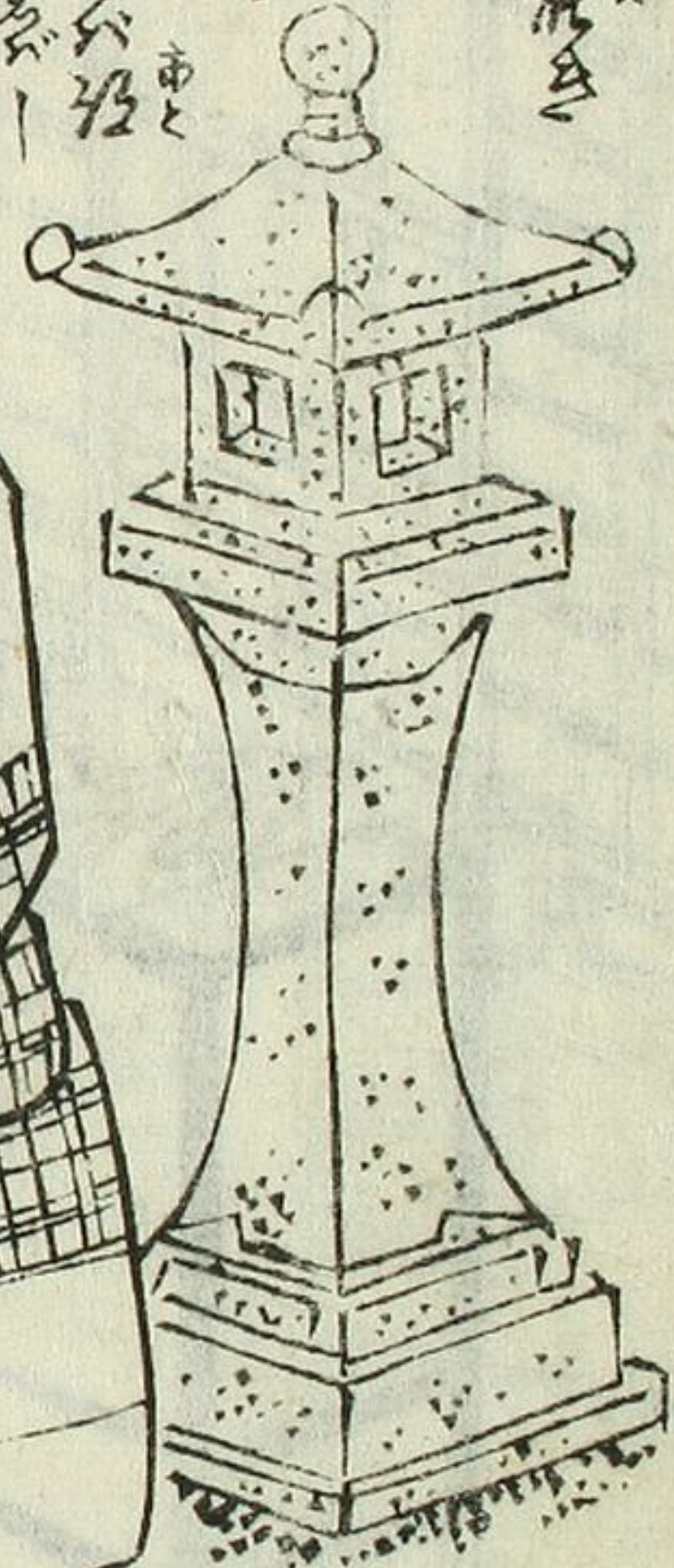
懐快の席へ入らる口とまやぶがたふ
 思ふぬ女をおさふお遊覧吐しの笑しつゝの連々
 今合は助かあつらふお秀の判方状元と吐しと
 さらうまア高懸入組むりッがあるあせま
 今日いふさう面白くおもふてある
 先へト云まのされて久者文
 治若とゆいしうの酒ををて園
 その日いふまゝ立別れを後業
 重か中へ入りしとてい治まのる
 ○安石の店へ怪と匠安以希の真件
 小敷田向く勤めいふ人とおとめ
 安石の店へ怪と匠安以希の真件



懐快の席へ入らる口とまやぶがたふ
 思ふぬ女をおさふお遊覧吐しの笑しつゝの連々
 今合は助かあつらふお秀の判方状元と吐しと
 さらうまア高懸入組むりッがあるあせま
 今日いふさう面白くおもふてある
 先へト云まのされて久者文
 治若とゆいしうの酒ををて園
 その日いふまゝ立別れを後業
 重か中へ入りしとてい治まのる
 ○安石の店へ怪と匠安以希の真件
 小敷田向く勤めいふ人とおとめ
 安石の店へ怪と匠安以希の真件

懐快の席へ入らる口とまやぶがたふ

不きりうけ
以と仲居
のわみ中
食や外せぬ
ゆひ入りか
何ゆきり
おのそ
要んお
あひん
うい
用と
婿来



我家へ
の形
狭
社
不
け
外
何
あ
う
用
婿

沈
家
為
の

我家へ
の形
狭
社
不
け
外
何
あ
う
用
婿



起
次
所
一



永島正徳

青盛堂壽梓

一編下



東京小間物類



△おひねり安氣

△

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり



ついで

とゆう

とゆう

とゆう

とゆう

とゆう

とゆう

とゆう

とゆう

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

△おひねり

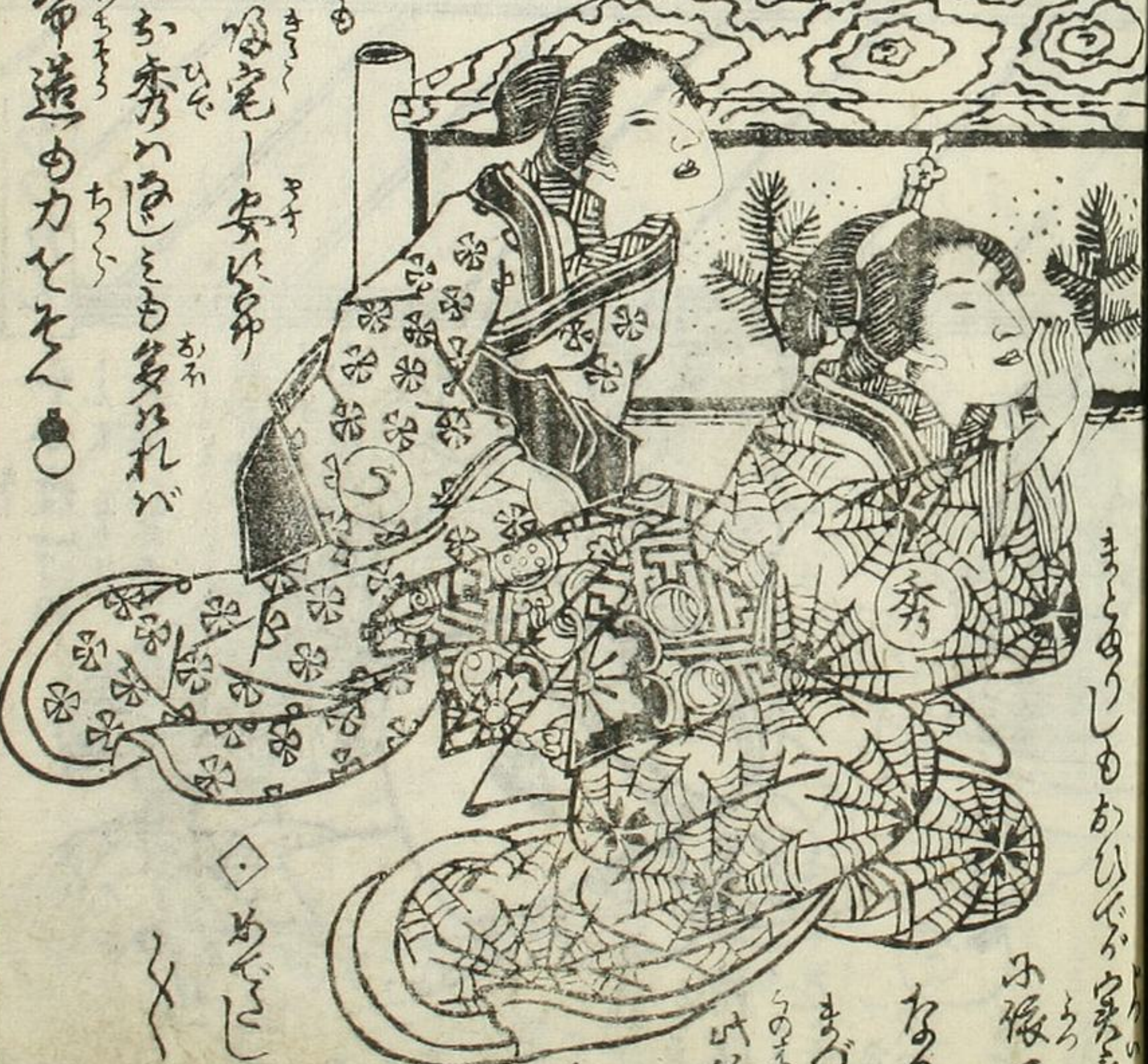
△おひねり

つぎ物さす云りば安房の物と云ふ若くはまを切て身と
 粉ふ碎き幸托まると傍りある海邊の河小小ひび
 通し安次と云ふ重利多日君必く之等別き後にも
 傳きまらうわりの内はあはれ
 安次と云ふ重利多日君必く之等別き後にも
 傳きまらうわりの内はあはれ
 安次と云ふ重利多日君必く之等別き後にも
 傳きまらうわりの内はあはれ

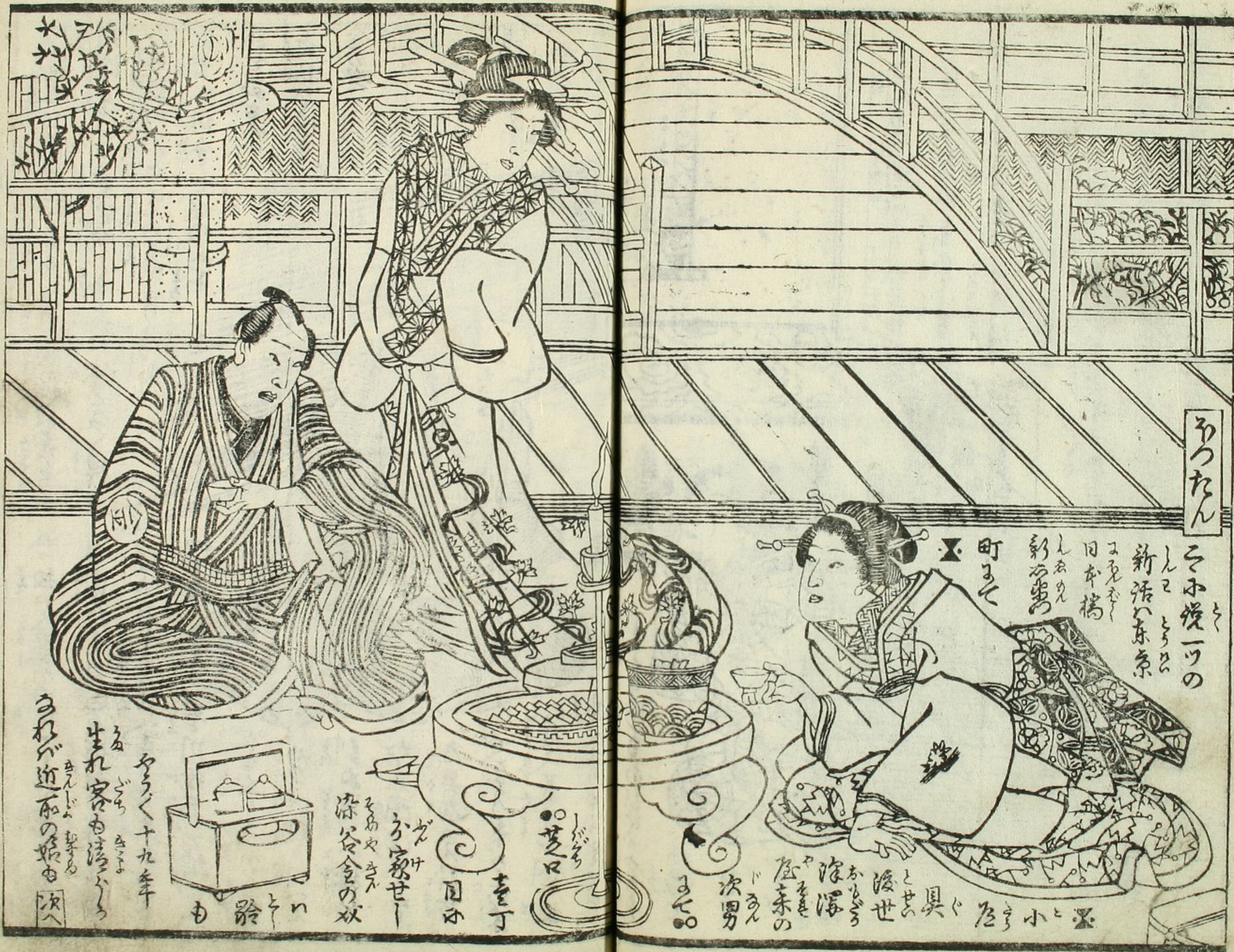


平去下
 うへ
 百と
 己けて
 徳せし
 六原
 無うぬ
 物されが幸
 抱とす倚父由
 春とび入と由し

△小間もの同をより代呂物
 と選つてのひは東系小乃
 物候との小目ふつく大看板
 と知し用店ふ及びひる小秀も
 希備と小西へ麻一岡おまほ完一安は身
 ぬ力を深へる向ふ勉強はか秀のほと由多はれが
 一日量ふはるもふ衣狩命造由力をそん



小後て
 なり
 まづ
 此後
 ぬ
 ぬ
 ぬ



りつたん

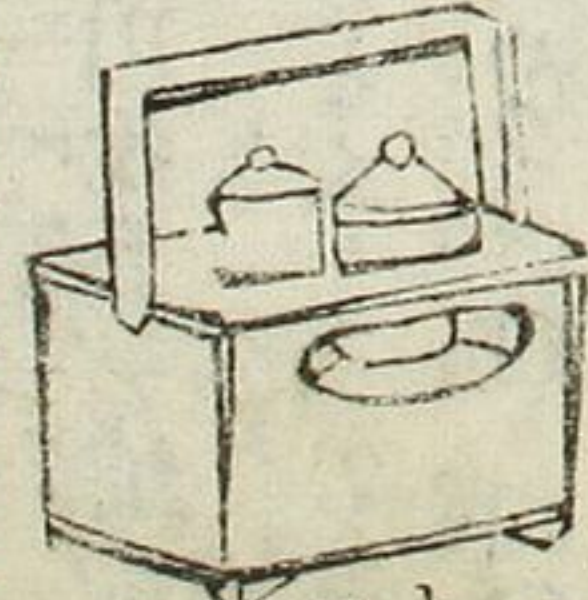
そ小後一ツの
しんごき
新活の東京

日本橋
しんごき
新活の東京

町ま

とせ
後世
おんご
浮世
屋敷の
次男
まご

かたせ
そのやきん
漆谷金の奴
目小
き丁



やうく十九年
生れ客由法
まねが道一の始由

景ゆ

海

日

三

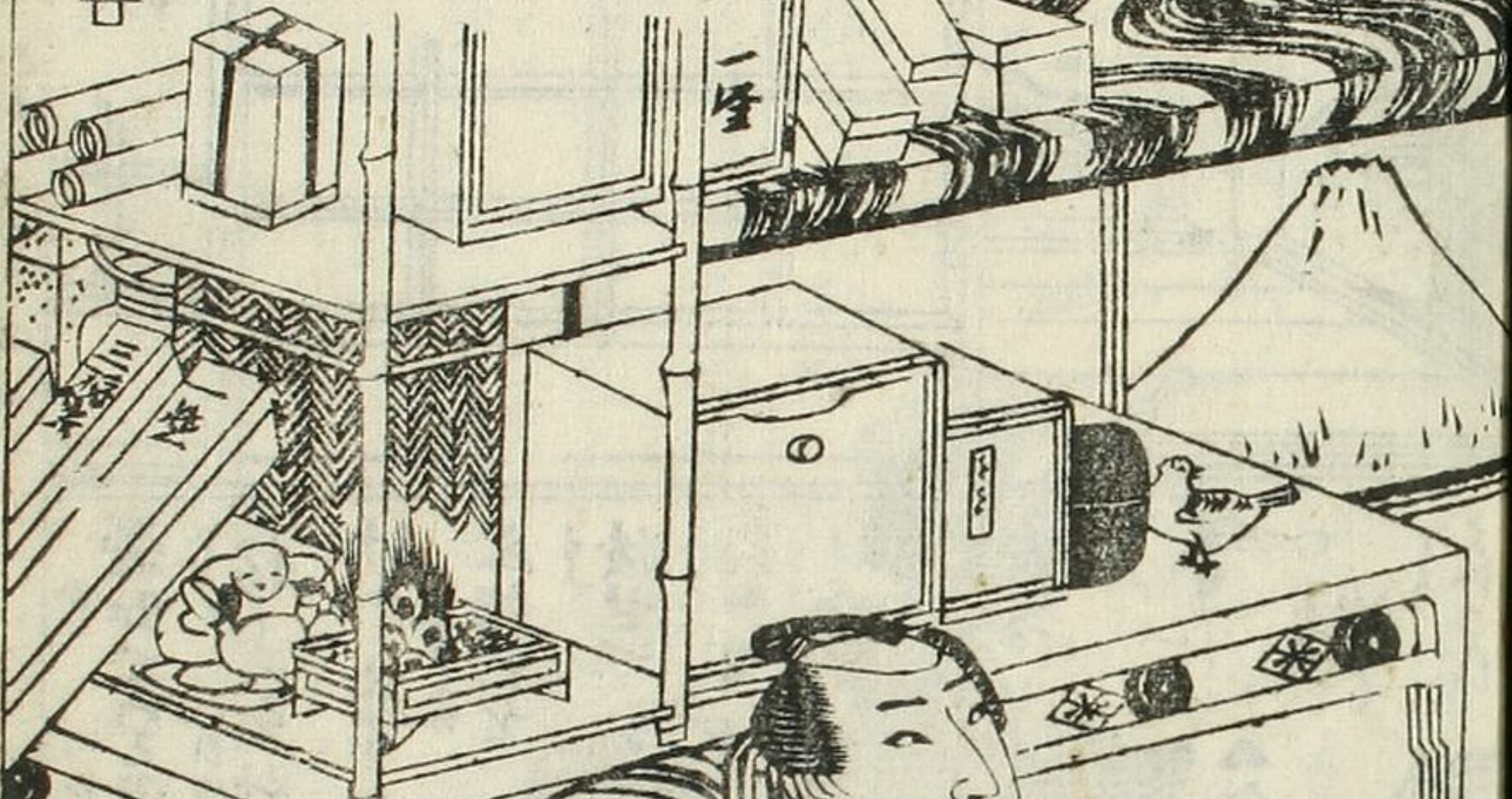
鳴と色にけりう若京若川橋の娼妓花も小
別添互ひ小突と酌し合後る言とさく通ひ
多ぶ或時ゆ家光の赤より後後
松糸の儀合を垢の二不
物と玉意小
賣扱ひじと

金の盤
深せーる圓
旋さげがト
後けとらち
森さびてあ
と愛みとら

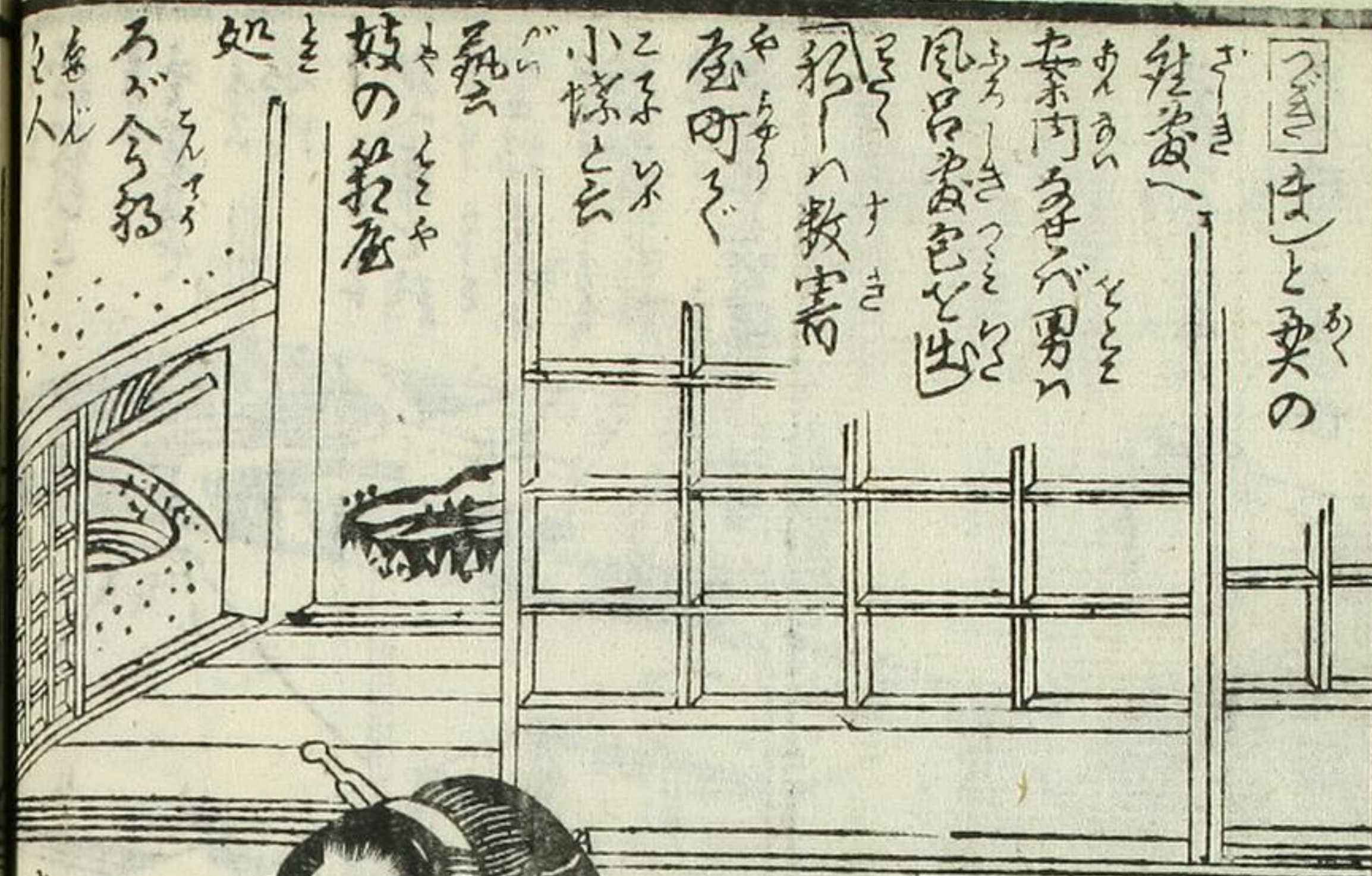


扱い人力車の中をえんとあへと途中
で産ひしうゆ若何処を探さん言
途由多く生筋へ届らん失物めなる
り川橋をと橋らん
とふふふんと痛
めろは折れ門へえ
別ぬ男が小提と
かめ淵ぼやトリス
左具登さんいけ方
でさうのキクといふ
産人兼花がへい扱
店心ありキがせら

希世のひと
生定まて
永川
橋へ車と靴
羽ま羽赤羽小
物宅はしと不
物の色とと探
赤糸巾巾の乃
よりにけりと
外羽らとあ
されは合のぬへ
大舟登るるさ



何れも一羽の数字を何くか出
まーと若け方で何う若しと扱ひあり
ませんうへー生事と大群さお若
まされらそつらい松一が持糸扱一も
トひねらる人
合をぬへ
立出を
とつへ
先つる
も産も
け方へお通りるされて下さう



はと妻の
 舞臺へ
 素内多六男の
 風呂敷色を出
 移へて教書
 可く
 小様と云
 舞臺
 妓の粧を
 処
 ろが今も
 人



出ての仕立を
 移へて付とふを
 け中拵と
 三処物と
 後世
 念の助
 紙幣を
 知ふねと
 つま
 子ハ飲
 己相放
 實ハ死
 後一林が
 宜方方に
 拾つれを
 子糸あ
 を成ると中
 ありか



小
 様
 が
 三
 光緒
 招き
 小色
 帯巾
 小様
 窓
 小
 様
 の
 仕
 立
 を
 移
 へ
 て
 付
 と
 ふ
 を
 け
 中
 拵
 と
 三
 処
 物
 と
 後
 世
 念
 の
 助
 紙
 幣
 を
 知
 ふ
 ね
 と
 つ
 ま
 子
 ハ
 飲
 己
 相
 放
 實
 ハ
 死
 後
 一
 林
 が
 宜
 方
 方
 に
 拾
 つ
 れ
 を
 子
 糸
 あ
 を
 成
 る
 と
 中
 あ
 り
 か
 小
 様
 の
 仕
 立
 を
 移
 へ
 て
 付
 と
 ふ
 を
 け
 中
 拵
 と
 三
 処
 物
 と
 後
 世
 念
 の
 助
 紙
 幣
 を
 知
 ふ
 ね
 と
 つ
 ま
 子
 ハ
 飲
 己
 相
 放
 實
 ハ
 死
 後
 一
 林
 が
 宜
 方
 方
 に
 拾
 つ
 れ
 を
 子
 糸
 あ
 を
 成
 る
 と
 中
 あ
 り
 か



小條田仙果録
 永島孟高画

藤の
 世
 初編

善
 美



薄汐草近世奇談



三編上

何 直 木 心 也
近 志 心 交 舞 也
何 直 木 心 也
近 志 心 交 舞 也

藻汐草近世
 奇談第三篇
 上之卷
 篠田仙果録
 孟齋芳虎畫
 青盛堂壽梓



花瓶の木蘭水と増して漸々開き鉢植の丁子枝曲りて色付し
 芝草の扉の外に輾る車乃停滞し秋葉の原に近頃流行
 自轉車と想像し青盛堂の主個々藻汐草の三編の
 未だ出来ぬと督責に原稿の繪入新聞に箱田千代太夫人の
 為永流の奇々妙筆其怪移世し土筆摘草を興へ無と一度の
 手にとり御覽の程と伏て願ふ者ハ



月齋痴人
 篠田仙果



同知哥



浪花の小龍

澤瀉屋金之助



悪漢魚藏

藻汐草近世奇新話三編上之巻

○三府のらちほも大坂の船の便利のと可成れが

巨商人殊小多く人をも自強と潤達

なれば是れ一トまうけとあし附(沢瀉屋

合と助ハ兼造の案内小大坂を流

渡通り一丁目の旅人需丸利方

と後高とよとあめり

若と一丁目もそと



兼造ハ

迫りなれハ

委細承知致

一はたと

お依り申して

お依り申して

お依り申して

お依り申して

お依り申して

藻汐草三上

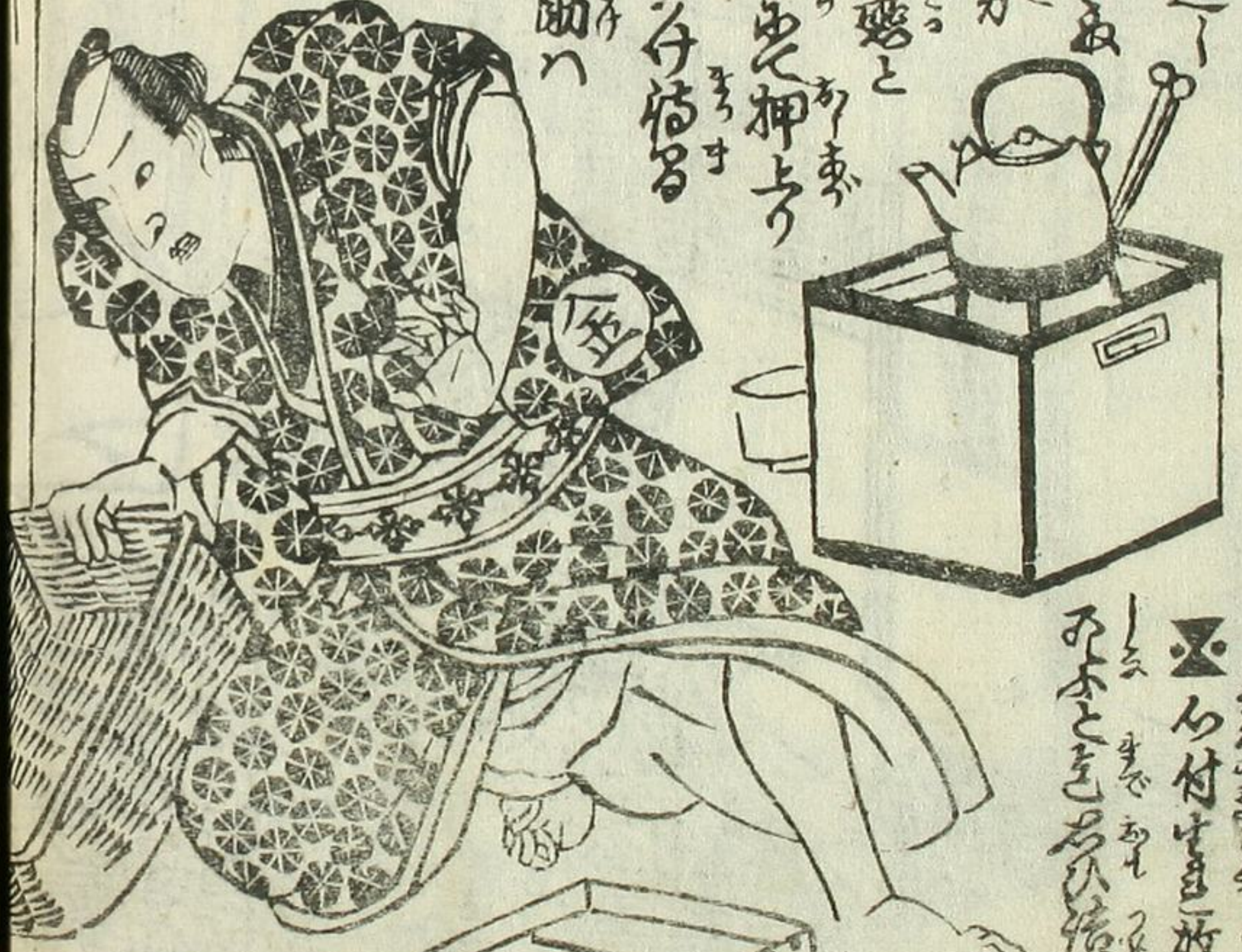


教娘
 心算月
 五七



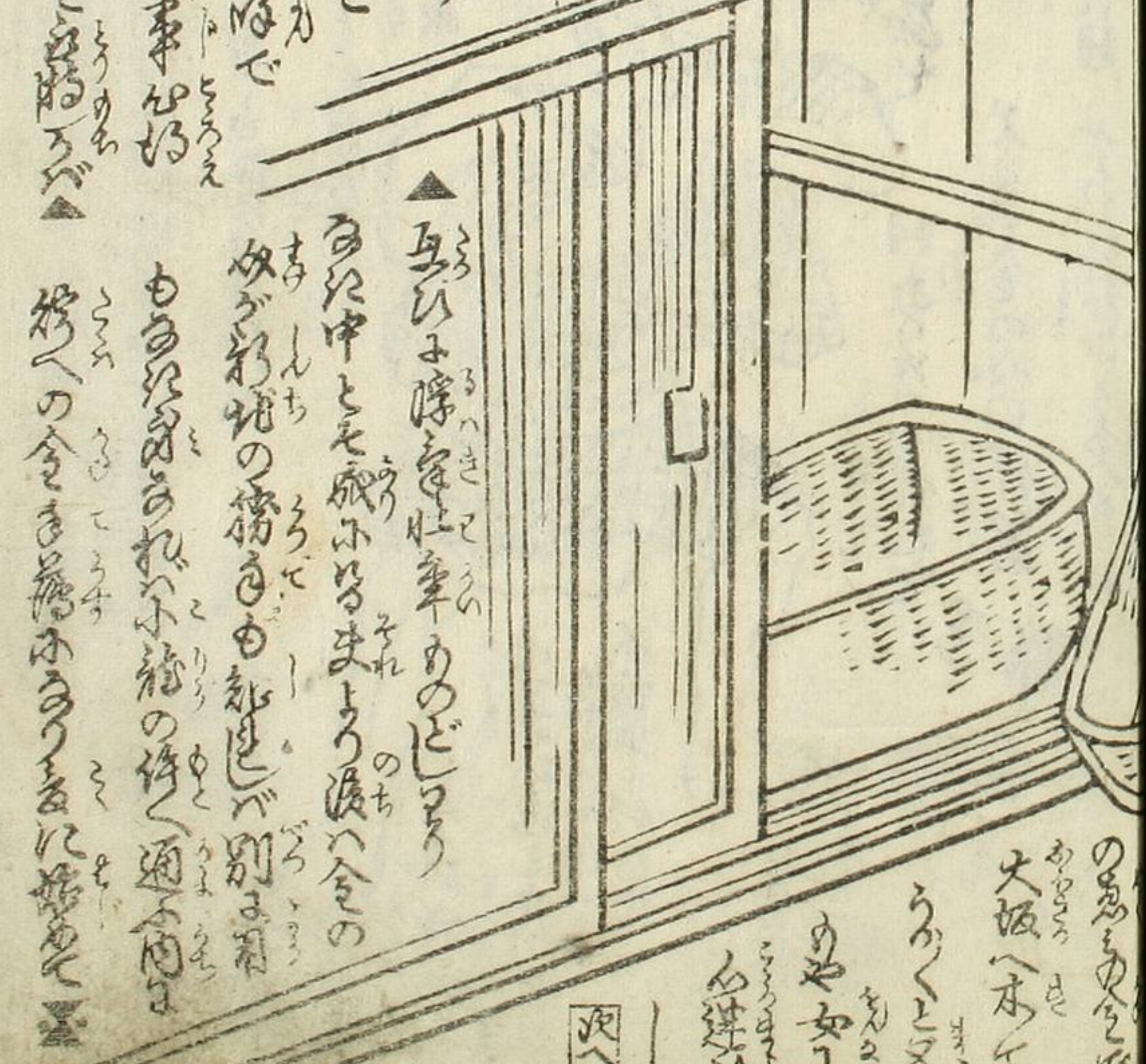
中世の
 の娘ゆてゆの影
 地代名代の
 娘まゝの
 事ゆ
 知れ
 後ろ指
 せさく
 きぬ
 やう
 よろ
 けけ
 の

小籠と揚て生指通を返し
 三つが種油第一と進進とせぬ
 と揚物にて中下映おた方
 よう水の影地を下目の影の響と
 小籠の影地を下目の影の響と
 伸長小籠の影地を下目の影の響と
 揚て生指通を返し
 兼造法は恒たそのれせ
 の之影指通を返し
 兼造法は恒たそのれせ
 兼造法は恒たそのれせ



小籠の影地を下目の影の響と
 伸長小籠の影地を下目の影の響と
 揚て生指通を返し

小籠の影地を下目の影の響と
 伸長小籠の影地を下目の影の響と
 揚て生指通を返し
 兼造法は恒たそのれせ
 の之影指通を返し
 兼造法は恒たそのれせ



小籠の影地を下目の影の響と
 伸長小籠の影地を下目の影の響と
 揚て生指通を返し

大坂へ来て
 の之影指通を返し
 兼造法は恒たそのれせ

〇〇〇の致すのひまをゆて...
 ありと終れ通ひを止まらぬれ...
 ぬと送れども...
 病はと終て眠せぬひ...
 の丸初へ...
 ぬの何でも...
 〇〇〇又兼造...



澡 汐 草 近 世 奇 談

初編より
 引續出版

松 飾 徳 若 譚

六編より
 追て出版

今 朝 の 春 三 組 盃

三編より
 追て出版

御届
 明治十一年十二月十七日
 東地本錦繪問屋

神田區仲町二丁目六番地
 編輯人 篠田久次郎
 日本橋區米沢町二丁目七番地
 出版人 堤吉兵衛

篠田仙果綴



三編中



藤沢州

近世奇談

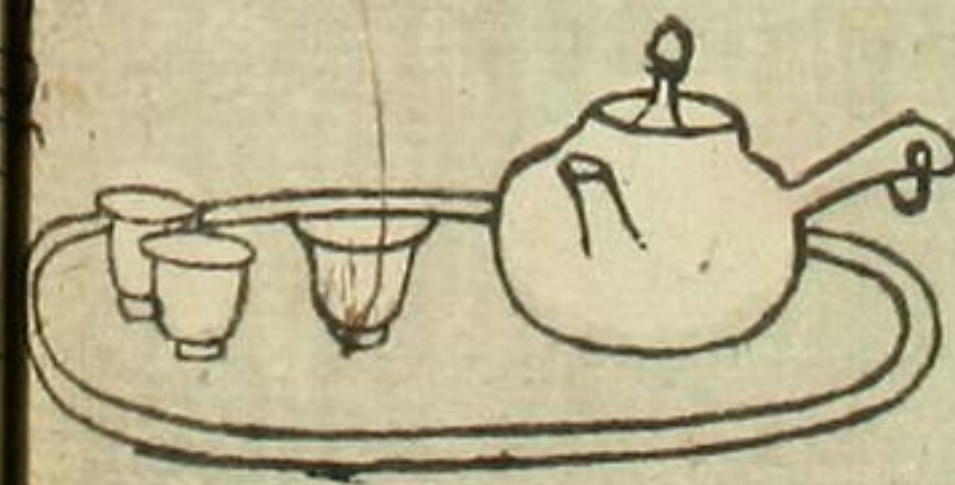
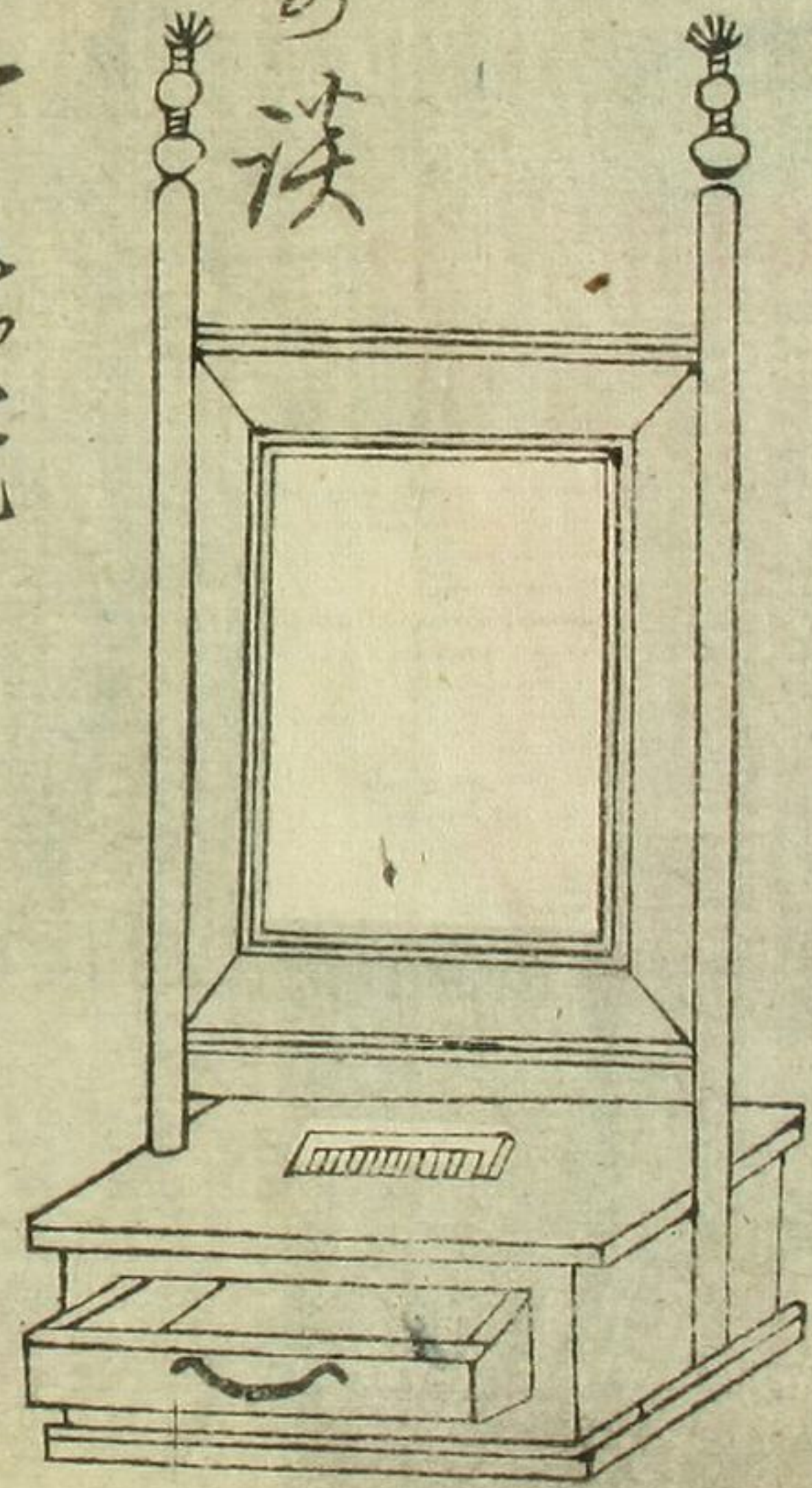
三編中巻

仙果録

吉盛堂

梓

より一画



○横の窓のふち小枝を折るは

山香の姿容を懐くは女

貴親の如く生誕

と知る若和隊

屋

指小遣

嗚呼此は僅むべき多徳も

縁とこれにそは夜に茶を二酒

一聖田九河以同と送再必

小籠と酒飲うは

小籠と酒飲うは

藤夕草三中

○備りのみ

往後小入り

又とて

小風呂

小風呂

小風呂

小風呂

小風呂

小風呂

小風呂

小風呂

小風呂



妙も
 のく
 播州
 仍んと
 身に
 一羽の
 終るま
 丸利への高料のころ縁費の
 手高小見流丸利のころ

小お向ひ葉遠の

病ぬとれい
 小お向ひ

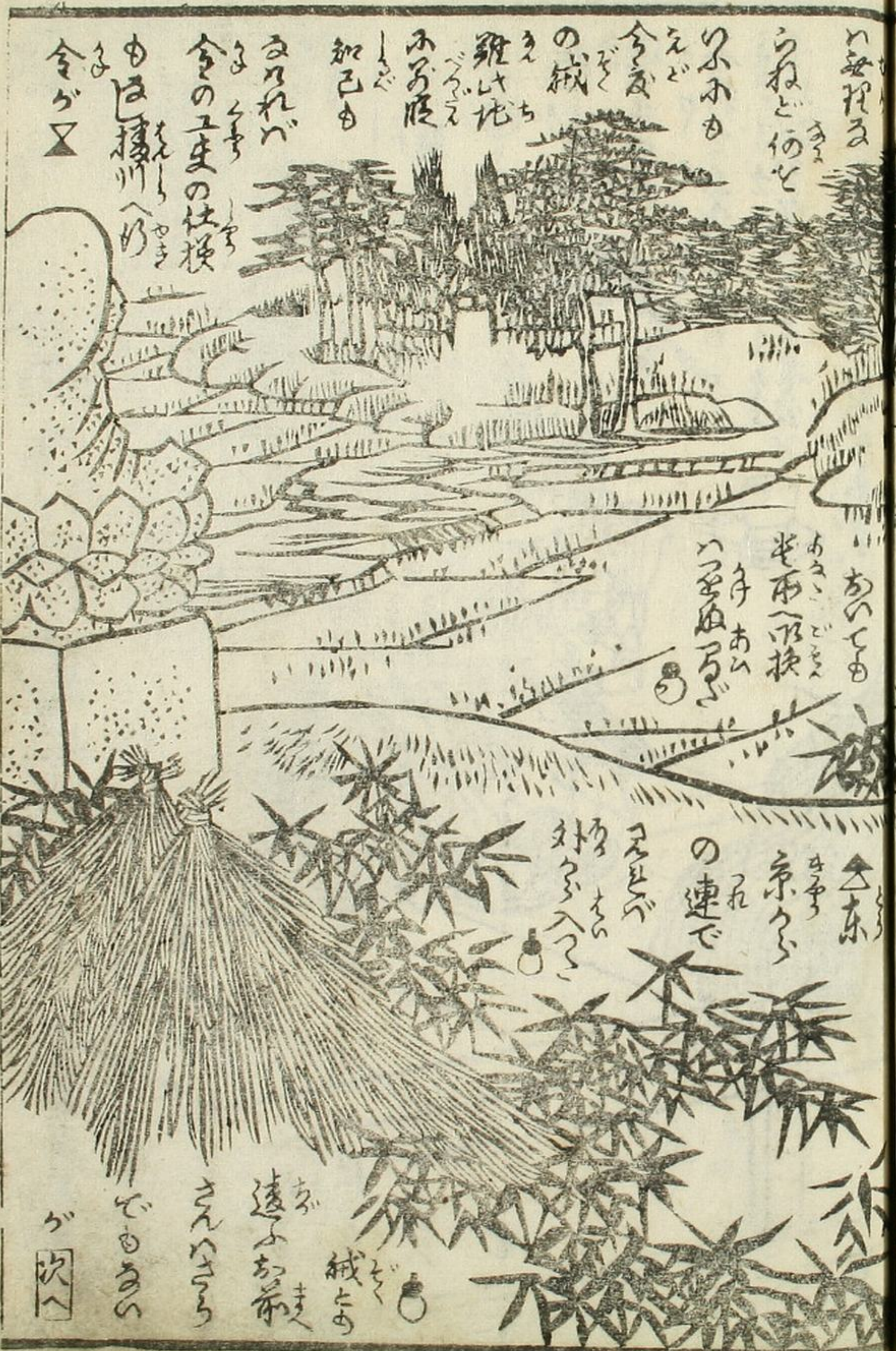
まげおれのころ丸
 利のそ人の取を
 ありせら角の
 おれとあれど
 出来ません
 始めて油の
 お方あれが
 申助定を
 雨をあられ



宿へ
 厚く礼との
 合も父の横井へ
 ありませむ
 自かをも
 村へ
 二保

播州へ出
 放
 ありませむ
 長西

合長儀さるる丸
 一羽の終へと
 てもあ
 ぬ身
 ありませむ
 播州
 ありませむ
 料を宿
 下されは行を
 の縁費とのか成る
 是と下さしはと面用



今更
 の城
 雞ヶ地
 小野原
 加己由
 五つれが
 金の工場のは換
 由は播州へ
 金がX

又きよもつ遠ひある
 東のとを候はして陸小
 何様も子ぐやにせよ
 播州へはまへる
 料の更死ませうん
 せ都らびのち家換へ
 貸つ子あひぬませぬ
 ト本で身くらうた
 換換小金とぬい
 舞にませ
 つた
 ねと何と



出来びが
 東京へはひと
 金金子と
 死よ
 せ

あいでも
 半布一匹換
 子あひ
 の連で
 糸くさ
 糸くさ
 糸くさ

白布
 料と
 留附の籠
 おつされ
 て下さつ
 けつらねめど
 所らつ
 絨毯

五
 三
 二
 一

三
 二
 一

次へ

太々詰 何のりや

御定宿

花講

「つき」連の若と扱
 合せ獨り先へ
 匠て並て持
 進不あやと扱と
 高料をふんておなま
 是迄道分有るも又老い
 程台目あは様油一好とりて東系へ

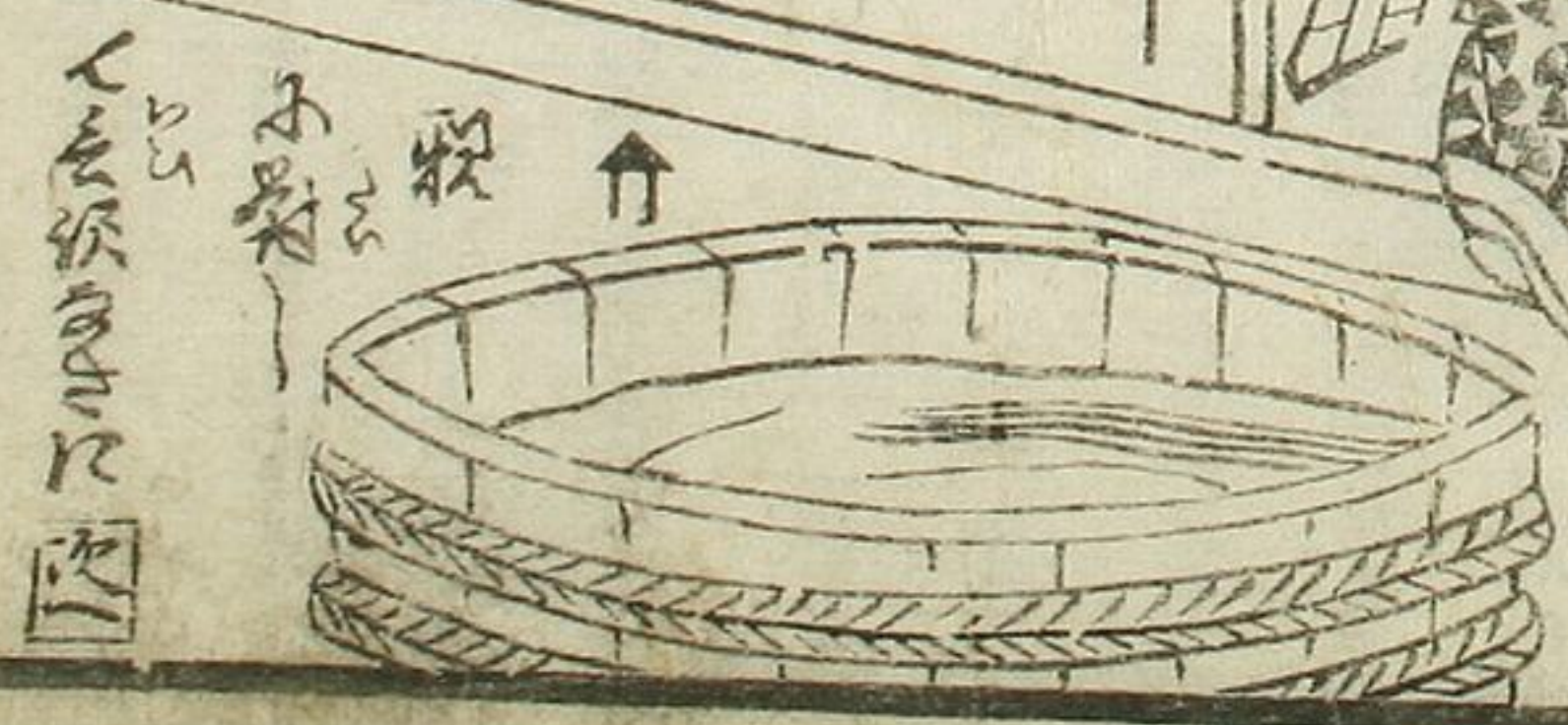


△ 新本第の町
 少く深源や
 とのふたぐ
 後世まで
 松の身の
 へん

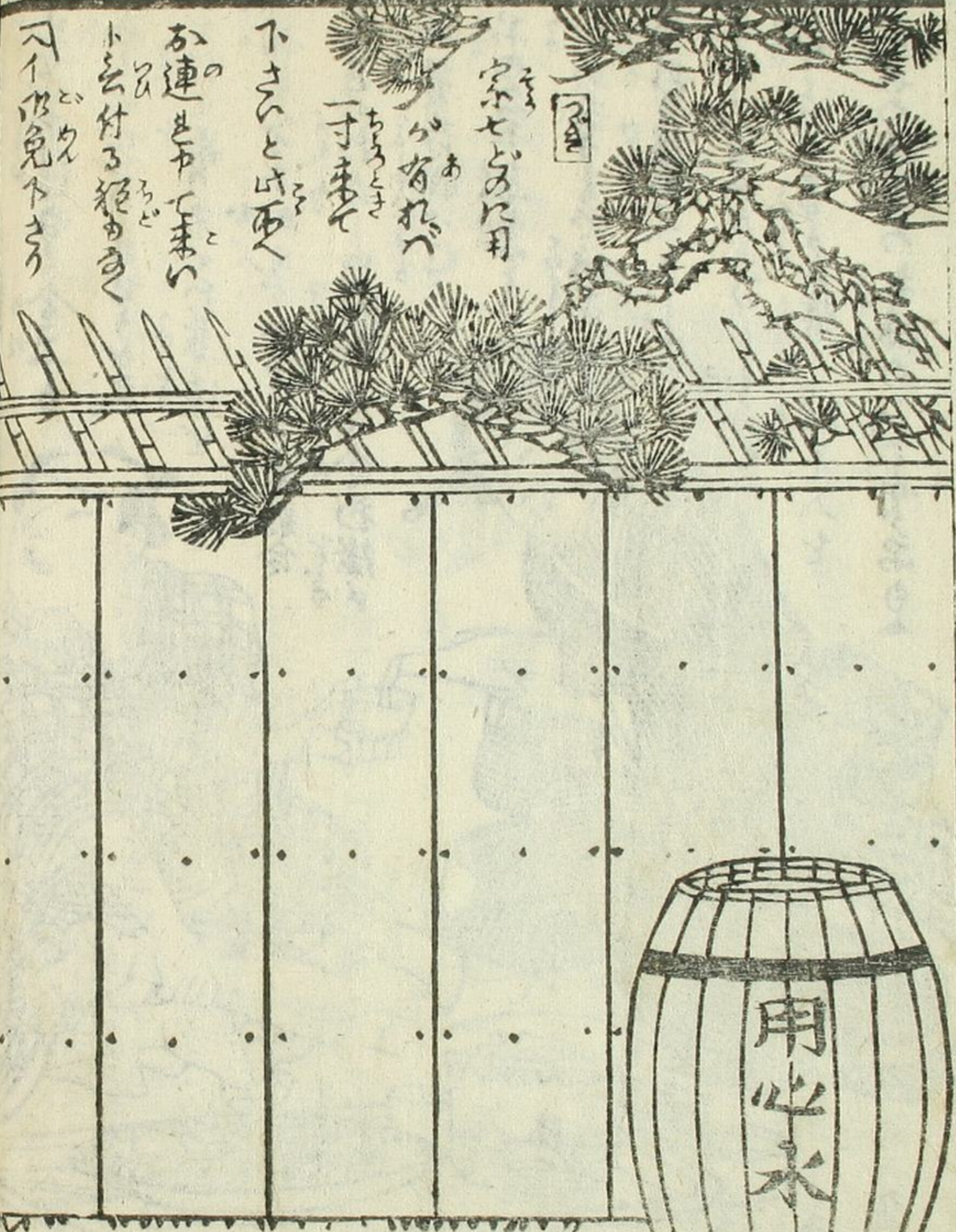
をを 合な実り

あや 了白

取んさるるうき程も扱はせぬ松方
 せかまふるあふふ茶屋敷のあ
 定あられま色付のひあひまの
 ませぬと情もくもあつて三二
 後のまこれと又つらくと考えまはるるもの
 おもりの取柄はせんところかひのせしあまの
 ひろく下守が付しは河を越して所へ標を入
 標管を二山余出へる故はききひこ
 名々の歴史中一箇々のお宿しを最ふりてい
 松とが親も世にあらねど安しとて家を被す換
 事へさしとて後ませぬ松の親昔は東系



くを扱きにて



用心木
つげ
注ぎ
立出
合之
左奥
の
了て

下階子
て
之個
さ
令
味
滅
お
か
入
膝



合
味
滅
お
か
入
膝
金
通

ふき 落てゆくト 象 鼓とて記してそぎ
案内するは二階より階への足力なりとわけ
兼造は延どうつ 下 妻掛らして教多く兼造
持てる益根付てまよと捕へんと



二階の採りよりを跳
らせと下りと花下り
遊まざる令の女の切齒をほ
積るるれど冷方多く有るるとち料理家活
もそのとらほひこれと始めくお虫の虫器なれば伯雨の
一向なとませんといふりれて力のあつれどおとあま
事あつねはあつれと多く二階後ある二根村へおねめ

中谷屋八を
ま今より代
不地まは
久家とま
何西のり
久家同ち
おれ
とまの張もこれ
かろのあつれ
まおれとと再び
治花へ戻りける

浮草近世奇談

初編より
引續出版

松飾徳若譚

六編より
追て出版

今朝の春三組盃

三編より
追て出版

御届

明治十一年十二月十七日

神田區仲町二丁目六番地

編輯人 篠田久次郎

東地本錦繪問屋

日本橋區米沢町一丁目七番地

出版人 堤吉兵衛

永島五郎画



三編下

青盛文庫



毛いほくさ

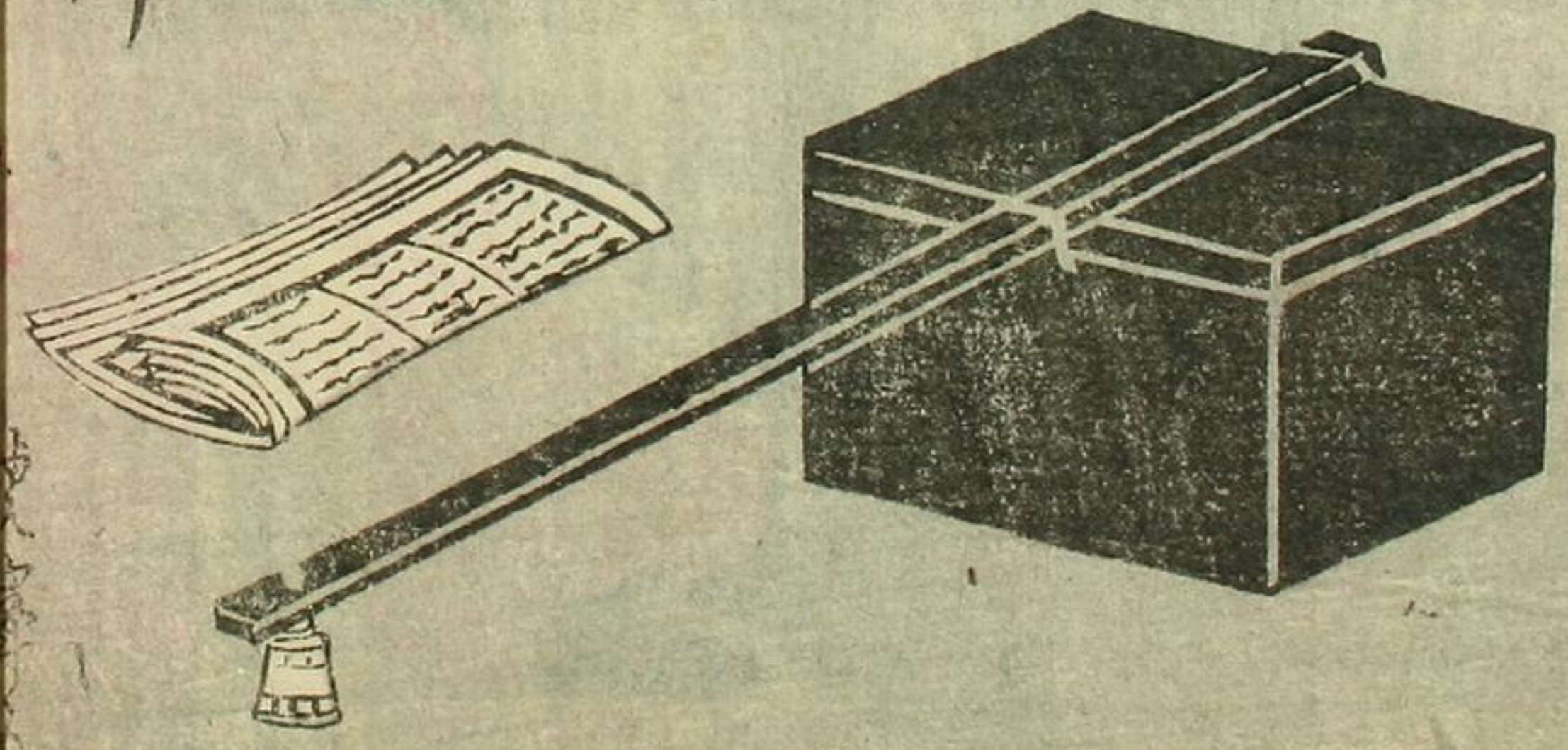
近世奇談

三つん下

仙果つる

よー虎走

青盛半々様



○可愛い子雨の縁と
短歌も今いひあそび
金とぬいすくくと六段へ
戻りしが優る

○可
地
林と
△那い

○来りたり目シ遠つるは免
あさの金とてい者ませんうと勢
うけられてき返す先
まろく極真に由世は貸席の閑

○可
地
林と
△那い

○来りたり目シ遠つるは免
あさの金とてい者ませんうと勢
うけられてき返す先
まろく極真に由世は貸席の閑



上原女博士三六

おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ



後世にされとて
おちろとらふ
おちろとらふ

及とす
おちろとらふ

後世にされとて
おちろとらふ
おちろとらふ

ト

おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ



おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ

おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ

おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ

おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ

おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ



おちろとらふ
おちろとらふ
おちろとらふ



△此は侍の
 らは年を食ふ
 今ハ叔の存て
 うは梅して

▲四方まきと
 ひき上りてこへ
 引寄小櫛の侍へ
 収束の世て全を



□人ぞ
 いちうい
 女の地へ
 飯より
 ちがう
 ひき
 らき
 めく

○この来と
 長多へ
 包
 郵
 せ
 成
 方
 ぬ
 赤

△此は侍の
 らは年を食ふ
 今ハ叔の存て
 うは梅して

日本雜會問呈

明治二十一年十二月十日

時



新到

知

黃金

金

出

入

日

月

日本雜會

雜

會

問

呈

幹田區中西

藤田西園

啓

出

本之印
心
人
之
印
及
記
号

清水石

010190508701

水
三

清
乃
齋

